明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

# 家庭雜誌

第四卷
第五號

明治三十九年五月一日發行

Dai 4 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 5 Gō.

春愁（堺利彦）……一
故山の情話（堺利彦）……二
日本婦人の貞操を疑ふ（中尾余瀬）……九
闘拳戯……一六
貧者の心得（大石祿亭）……一七
實費調劑所……二一
わが從妹の將來（久田二葉）……二二
なまけ者の福音（白柳秀湖）……二六
人情なき教育者（安藤曲川）……三〇
老友の詩（堺利彦）……三二
小說 猫の爪（西村渚山）……三四
婦人新論（第一章）（堺利彦）……四一
多摩川の渚にて……四七
日米結婚の新家庭……四八
聖書と婦人の權利に就て（中尾余瀬）……四九
新刊紹介……五一
由分社より……五二
本誌の寄書家……五二
チラシ配り……五三
羅馬字欄……五五
家庭雜誌前號目次……五六



由分社
東京市麴町區元園町壹丁目廿七番地

# 第五回內國勸業博覽會銅牌及褒賞狀受領

登錄商標



壽美禮
おしろい

五二會品評會功勞褒牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ウヰオレット煉製
瑪瑙附乳白硝子壜入
壽美禮おしろい




## 壽美禮おしろい

ねり製 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）
水製 定價（大壜 中壜 小壜十錢）

ヴワイオレット水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成蹟液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨て衛生上生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

## 西洋洗滌劑 壽美禮あらい粉の特性

● 弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれは朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

● 常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を染白する性あり

● 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶番ひ 大袋入 二錢
鑵詰 六錢五厘 袋入 壹錢

登錄商標
西洋色白くなるあらひ粉
SUMIRE.
Washing Powder
壽美禮あらい粉




製造本舖 東京東兩國 元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

出でたり！最新最良の婦人智恵袋

西谷龍顯君編著（新刊）

# 婦人の重寶

◎大版美本◎價五拾錢郵税六錢

## 本書の內容

（一）家事の重寶
△掃除法△臭氣を去る法△家具しみぬき法△洗濯法△艶き法△釘拔法△錆を去る法△接合法△洋燈の注意△虫退治法△家具保存法△鞄の取扱法

（二）臺所の重寶
△玉子料理と飲料△肉料理△穀類野菜の調理△菓子と果物△臺所の心得△物の貯藏法△物の試驗法△廢物の利用

（三）育兒の重寶
△幼兒の保育△初生兒の營養△衞の注意△小兒と睡眠△小兒取扱上の注意

（四）醫療の重寶
△應急の手當△中毒の手當△飲食物の注意及藥品△病時の注意△病氣傳染豫防△凍瘡の手當△種々の手當△川具の手當

（五）衣服の重寶
△白色もの、取扱△フランネルの手當△メリンスの取扱△黑色しもの、取扱△毛皮の手當△面布の取扱、取扱△毛糸しの、取扱△靴下の注意△羽毛の手當△しみ拔き法△染色法△裁縫の要

（六）化粧の重寶
△色を美しくする法△髮毛を美しくする法△眉毛の手入△齒の養生

（七）ナフキンの折方
（一々繪圖を入れて說明す）

以上を各數百項目に細別して最も分り易く通俗平易に說明してあります

▲女子や細君の知つてゐなければならぬ事は若細かい事ばかりですが、此を大體心得て置かぬと婦人の役が勤まらないのです。▲それを知らない爲に眞んに輕ぜられ▲小供の病は、又想像から笑はれて居るのもなし御存じない方がお有ます。▲それで此大變といふので著者は數を問ひなして此種がいない數手つ心得を一々自然を紹した說にでも出經る樣に拵へたのが此本ですから▲こんな都合で此實が本は外にはありません

堀內新泉君著

# 娘へ與たる母の書翰

大版全一冊 極めて美本
價四拾錢 郵税六錢

●本書の目的は、我が國今日の婦女をして、廣く世間の實理實情に精通せしめむとするに在り。著者は我が家庭文學の首唱者にしてその想穩健、その文流麗こゝに兩々相待つて、箇中の消息を備さに說破し、餘鋒深く骨に入る。題して單に「母の書簡」と云ふもその實今日の時勢に最も適切なる好個の「婦女處世讀本」なり人の母たる人は本書を讀まれよ。人の妻たる人も本書を讀まれよ。またこれより人の妻たり人の母たらむとする處女の君達に至りては、更に大いに本書を熟讀し給はざる可からず。

東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 電話（新橋七四八） 賣捌 各地書店

# 見よ！大發展大擴張の婦人世界！

大好評　**婦人世界**　大好評

五月三日發行　毎月一回　**第五號**　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九拾錢　一年分一圓七拾五錢

**口繪**
●東伏見宮邸内日本婦人衛生會
●各女學校卒業生總代と製作品
●華族女學校及女子大學卒業生
●跡見女學校卒業生幷に教職員
●彩色石版◎花と小犬……
●繪手本◎杜若……跡見花蹊
◎躑躅……小澤弘光

## ▲婦人の日常生活法……村井弦齋

◎婦人は何が一番大切か◎朝は如何に床を離るべきか◎いろいろの悪い習慣◎いろいろの善い習慣◎夜具は如何に疊むべきか◎厠には何時行くべきか◎齒は如何に磨くべきか◎顏は如何に洗ふべきか◎洗面水は何を交ふべきか◎手拭は如何に使ふべきか◎鼻は如何に洗ふべきか◎石鹼と洗粉とは何れが好きか……

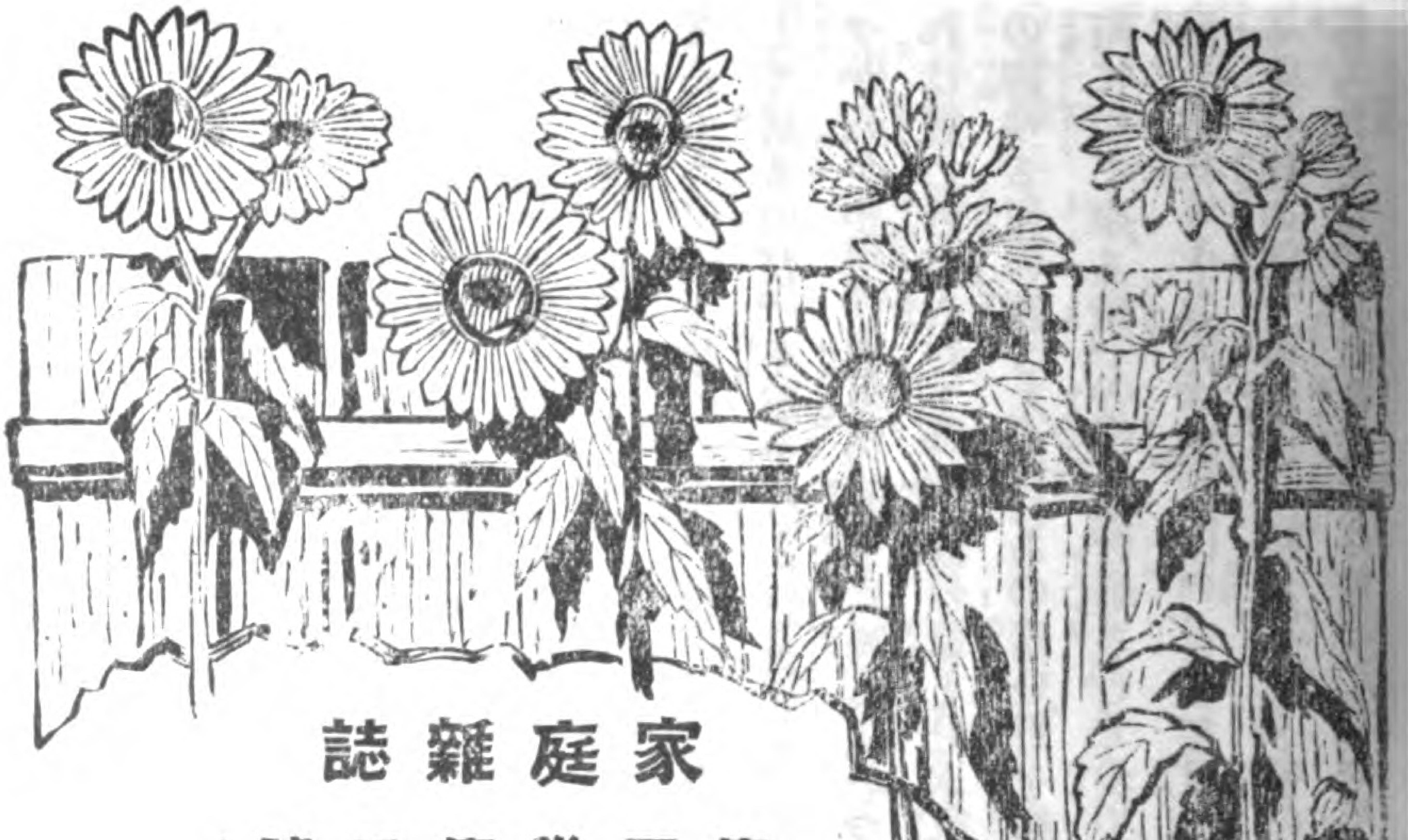
▲女學生に家事を見習はしむる法……星常子・嘉悦孝子
△妻君重寶記……▲便利なる西洋家具
▲繼母の鑑菊池博士夫人……樂石生
△女子の天職……理科大學長理學博士箕作佳吉
▲婦人の衛生……醫學士伊庭秀榮
△家庭菓子製法……▲生花指南
▲嘘つく子供の所置……大村仁太郎
△荘田平五郎氏の家庭……古月庵
▲家庭料理……赤堀峰吉・石井泰次郎

△小兒の食物……ドクトル加藤照麿
▲女學生墮落の眞相……桧齋
（十二頁の長篇女學生父兄必讀）
△最新流行の婦人靴……▲新形洋傘
▲投身せる一婦人……ちどり
△あゝ可笑しい……鶯亭金升
▲出産時の心得……△家庭おぼえ帳
△男女學生の交際……女子大學學監麻生正藏
▲美人となる法……みどり
▲女子不可見記……鬼門外史
△小説　秋子……長谷部湘南
▲育兒問答……△衛生問答……

**特別附録**
婦風悲劇　**女道樂**　脚本　村井弦齋
**懸賞**　讀者文藝



發兌元　東京京橋區南紺屋町十二番地　**實業之日本社**（電話新橋八七四番）　賣捌各地書店



# 家庭雜誌

## 第四卷第五號

明治三十九年五月一日發行

## 春愁

堺利彦

△僕の家に二間四方の小庭がある。此の小庭に海棠が咲いて居る、山吹が咲いて居る、ツツジの赤い蕾が出來て居る、楓の若芽が風に戰いで居る。暖かい日もさす、糸の如き雨も降る。何處からともなく櫻の花瓣も散つて來る。春色が四坪の間に充ち滿ちて居る。

△春色と云へば、固より陽氣で、長閑で、浮立つ樣な心持がするが、然し又其底に春愁と云ふ感じもある。何となく胸の小琴に輕く障らるゝ心地がする。兎もすれば涙のホロ〳〵と飜れそうな時がある。獄窓の下に居る我が深尾君などは、こんな時、どうして居る事やら。

△僕の家には此頃友人の子供(六つになるの)を一人預かつて居る。是は深尾君と同じく、電車事件で監獄に行つて居る人の子で、其おつかさんは三年前に無くなつたのである。自分の子は人に預けて、人の子を世話して居る。世の中は面白いものだ。

# 故山の情話（上）

堺利彦

◎僕故山に歸臥してより既に半歳、大概もう近隣の歴史と新聞とに通曉した。久しく故山の情話に饑ゑたる君に、今日は存分の滿足を與へる積りだ。僕の爲には是が留守番の一日を暮すの策だ。

◎先づ第一に報ずべきは小石謙作の事だ。彼れの鼻垂にして拙作と稱せられたりし事は君の善く記憶する所であらう。而も彼れや今、村中第一の美人を得て妻として居るのだ。今が十八といふから、其昔しはまだ七ツか八ツかで、我々の眼中に映じなかつた蕾だが、それは實に君美人だよ。上坂の原といふ家の娘だが、其の謂ゆる原の孃さんが、あの廣い野を横ぎつて豊津の町に出て來る時、女郎花が傘さして歩く樣だと、皆人評しあへりとなん。然るに、どうだ君、此界隈に於けるそれ程の誇りの花が、むざ〳〵と彼の鼻垂氏の手に落ちたとは。實に君憤慨に堪へんぢやないか。然しそ



れも何故、お金故だ 小石の親爺は打殺しても死にそうにない頑丈な男であつたが、どうした事やら三年前に卒中で頓死した。跡には大ぶんの金を殘したそうだ。茲に於て乎、鼻垂氏の拙作君は、一躍して大家の主人となつた。忽ちにして父の後を襲うて村會議員となつた。近々郡會議員にもなるそうだ。あそこのお母さんは、君も知つてるだらう、昔から縫物の師匠をして居る。今でも仕て居る。原の孃さんなる者は其の弟子の一人であつたのだ。そして此の御師匠さんが、弟子の中より逸足を拔いて、以て我が子に配した譯だ。斯ういふと、君は直ぐに例の小說家的空想を逞しうして、其の原の孃さん、名はお國といふのだが、其お國さんの本人は心中甚だ不進であつたのを、一方には親達にすゝめられ、一方には御師匠さんに對する義理にからまれ、泣く〳〵拙作君の腕に擁せらるゝに至つたのでがなあらう、實に憐むべきものだなど丶思ふかも知れぬが、事實は決してそんな譯ではない。駿馬痴漢を乘せて走るといふが、其駿馬が其痴漢を以て誇として居

るに至つては、悲慘の極の滑稽、滑稽の極の悲慘と云はねばならぬ。當時小石家の西太后が、鼻垂氏の爲に好配を求むると聞えた時、何しろ三千圓！からの身代ではあるし、若手の村會議員ではあるし、行々は村長の榮職にも就くべき人柄であると云ふので、娘持つ親々は皆な頗る其心を動かしたのである。殊に日々其家に出入する縫物の弟子の娘達に至つては、皆な竊かに其撰に當らんことを望んで、嫉妬、猜忌、讒誣、排擠、盛んなる暗鬪が行はれて居たが、それが遂にお國さんに落札したと聞えてから、冷かしやら、惡口やら、『そりやアお國さんは別嬪ぢやけえなア』『別嬪は得な者ぞな。引張凧にしられて立派な奥さんにお爲りる』『私達の樣なお多福は日傭取の女房にどもなつて、お國さんの處い針仕事でも爲せて貰はう。お國さん其時にやア爲せてお與れるぢやらうなア』など〻やられたので、お國さん或日とう／＼途中で泣出したといふ事だ。そんな譯であるので、お國さんたる者は、憐むべきところの段ではなく、彼の痴漢拔作君を乘せ得たる事を以て



無上の光榮と爲し、豐津第一の美人は豐津第一の仕合者として、人も許し、我も信じて居るのだ君。厭になつてしまふぢやないか。それで愈々婚禮のあつたのは去年の冬だが、僕はツイ先頃この新夫婦が上坂に行くのに遭うた。拔作氏は少々丈の短い奉書の紋付の羽織に、水色縮緬の兵兒帶といふ扮裝で、まさかに鼻を垂らしては居ない。然し僕の心の目には、此人の容貌を思ひ浮べると同時に、必ず其の鼻の下の二本棒（若しくば其の痕跡の赤い筋）がアリ／＼と現はれて來る。僕は其時、久濶を叙しながら暫く彼と立談して居る間にも、彼が其の鼻の下の稍長き空地に（彼は全く髭を有せず）、今にも二本棒がズルリと流れ出るのではあるまいかと危んだ。そして今にも彼が其の尖つたる舌の先を上に曲げて、チョイ／＼とそれを甞めるのではあるまいかと思はれた。然し善く見ると彼は既に一村の望を負うた若紳士であるのだ。殊に其の妻たる人の目より見るならば、仰いで以て之に仕ふべき、天晴れ威嚴ある男子であるのだ。それから僕は始めて此の時の

美人のお國さんに紹介せられたが、お國さんは赤い手がらの大丸髷型の如く、うなだれ勝に耻ぢらうて、其の襟足の白さと生際の善い髪の黑さとを僕の目の下に見せつけて、しやなりとして居た立姿は、それは君、實に美しい女郎花であつたよ。成程是ならば拔作君が其の青鼻を啜りあげて得意になるのも無理はないと僕は思つた。ハヽヽヽ僕は決して燒くのぢやない。只だ感嘆するのだ、讃美するのだ、而して之を痛惜するのだ。

◎それから君は我々の時代の名花であつた、あの荒谷の坂の下の、松村のお久孃を記憶して居るだらう。彼女は實に寡言にして笑を惜む人として、高峰の花の如く我々の間に仰がれて居たでは無いか。彼女は一人娘であつた。我々の友なる（今米國紐育に在る）薄田の如きは、彼女と再從兄弟たるの關係に依つて、當時いさゝか故なきに非ざりしは、君も知つて居る通りであるが、一人娘で嫁にやられぬと云ふ家族制度の下に、彼等は只だ僅かに其の幽かなる情緒の交換を以て滿足



して居たのである。そして薄田はそれきり故郷の土を踏まず、お久孃は久しからずしてすなほに養子を貰つてしまつた。養子といふのは豐津小學校の首席訓導で、我々の知らない人だ。いつぞや僕があの家の前を通つた時（家は依然として竹籔の中の茅葺だ）、桔槹釣瓶の井戸の側で、洗濯をして居る女の姿が垣越に見えたので、稍や好奇心が動いて來て、少し立寄つて覗いて見ると、變つては居るがお久さんに相違ない。あの面長の細い人が、甲斐々々しげに二ッ子を引ッちよつて、白い湯もじの膝から下を現にして、盥の中で何やら赤い切を洗つて居る。そこに四ッと六ッと位な女の子が二人、いづれも母親似の、小作りのカッチリしたのが、『おかアさん』『おかアさん』とサモ事ありげに走つて來た。來たかと思ふと小さな方は何かに躓いてバッタリと仆れた。ワアーッと泣き立てる、駈けよつて抱きおこす、鼻血が出る、拭いてやる。やつとの事で雨は收まつたが、兩手に握んで居た蝸牛は何れもグチャリと潰れて居る。姉の子はと見れば、是も同じく兩手に蝸

牛を攫んで居る。さすがの笑を惜む人も『マア御前達や、どこでそんな物を取つて來たかな』と、呆れた顔に微笑んで居る。あゝ其の少し釣りたる目に浮ぶ微笑よ、猶ほ是れ昔のお久孃であるのだ。而も其の小作りの身に著るしき、只ならぬ腹の膨みを察するに、彼女は早く既に四度目の母とならんとして居るのである。綠葉陰を成して子枝に滿つ、十年の月日は實にエライ變化を示すものだ。

◎變化と云へば君、我が故鄕の經濟上の變化は實に激甚だ。小石の如きは殆んど例外で、松村の如きも亦た上の部だ。豐津の瘦松原は彌々瘦せて、貧乏士族は彌々貧乏となつた。君は杉田の家を覺えて居るか。そらアノ、男の癖に深い笑渦のある庄太郎といふ子のあつた家だ。あの家の如き、一時は養蠶を盛んにやつて、大ぶん景氣よく見えて居たが、或年一度蠶を腐らしたがケチの付きはじめで、其翌年には糸取の名人なる姉娘が死んでしまふ、(オット待つた、君はアノ人と萬皿他人で無い筈だ。チ、そうだらう。白狀せえ、白狀せえ)又其翌年には糸の價が半分に下るといふ樣な事で、今では見る影もない零落だ。庄太郎は朝鮮に行つて居るとやら。それでも庄太郎のお母さんは、今に於て續々と子を産んで居る。十三人目といふ事だ。『内にやア入らん物ばかり增つて仕方がない』『子やらひの貧乏が一番つらい』などゝ云ふ述懷を聞いた事がある。あそこのお爺さんはまだ生きて居る。赤い頭がツル〱に禿げて、丁度目黑の不動にあるおびんづるの樣だ。

◎それから我々の友達だつた古賀の德衛。德やん、德やんと云つてねえ、あの通りお婆さんのホンソウ兒であつたが、其のお婆さんも珠數をつまぐりながら地獄に行つてしまひ、續いて親達も不思議な樣に一年に一人づゝ死んでしまひ、跡には德やんが澁皮のむけた馬の骨を拾つて來た。馬の骨を拾はうと、牛の角を抱いて寢ようと、入らぬお世話であるのだが、そこがそれ狹い田舍の事だ、蔭口が實に激しい。『あないな者を引張つて來てどうする積りぢやらう』『あれぢやけえ今時の若い者はどもならん』などゝ年寄連がやつて居た。

然るに德やんは平氣なもので、何たら會社を立てるのだと觸れちらして、洋服なんど着て騷いで居たが、とう〳〵借金を踏倒して夜逃をして、古賀德衛は行衛知れずになつてしまつた。

◎あのノッポーの中村金之助は、得意の長髓彦を以て往復四里の道を遠しとせず、どこやらの小學校に通つて居る。月給は八圓だそうだ。汽車が通じてから物價は高くなつたし、彼れの曾てツク〳〵嘆息した所に依れば、彼れの母と彼れの妹と三人の一家を維持するのに、到底八圓ぢやア遣りきれないそうだ。假令働き者のアノお母さんが地機を織り、金之助君が裏の菜園を作り、猶ほ夜間に近處の子供に本讀をして何某かの謝禮を得るに仕た處で、到底やりきれぬ筈である。それでもお母さんは『誰か内の樣な處にでも來てお呉れる人は御坐んすまいかなア』と、絶えず嫁を探して居る。併しアノお母さんの生きて居る中は迚も駄目だといふ人もある。

◎それから藤井だ。彼奴は役場の書記をして月に六圓



七十五錢貰つて居る。七十五錢がをかしいぢやないか。それでも彼奴は女房を持つて居る。可愛そうにチョット愛嬌のある美い妻君だ。そして藤井は樂天的な男で、此間僕がチョット寄つた時、なた豆の煙管で粉煙草を吹かしながら、あの蛭子の樣な目を笑ひつぶして『僕達アもう生涯腰辨當と極めとるのぢやけえ安氣なものぢや。辨當の菜は三百六十日高野豆腐と極まつとる。アッハヽヽヽ』とやつて居た。

◎藤井の事を云へば、勢ひ藤井の親類なる山本のヲバさんの事を云はねばならぬ。若後家として有名なりし彼の人を、君は勿論忘れはすまい。然し今ぢやアもうそんなに若くもない。然し浮名は依然として立つて居る。ヲバさんは今素人下宿の樣な事をやつて居る。中學校の生徒と鐵道の役人とが宿つて居る。其の鐵道の役人といふのは酒飲みで、醉へば直ぐに義太夫を唸りだすといふ難物で、それにオバさんも二三杯はいける、三味線も少しは彈けるといふのだから堪らない。實に浮名の立ちやすい地位に在るのだ。然しながら、そん

な事でも仕なくちや食へないのだから仕方が無い。何も切歯扼腕してあのオバさんの白髪染と入歯とを攻撃するには及ばないと僕は思ふ。僕は昔し藤井と一しよに彼家に行つて、毎度旨い物など食べさせられた事があるので、實に喜いヲバさんだと思つて居た。今でもソウ思つて居る。夫だの、子だの、孫だの、無い人は、廣く人を愛するの風があると僕は思ふ。僕は昔日の恩に酬いんが爲に、敢て今日に於てあのヲバさんを辯護する譯では無いが、あのヲバさんの如きも、亦た實に此理に依つて其の素人下宿を賑はせて居るのだ。我子ばかり夢中に可愛がつて、人の子は見も返らぬといふ母親、又は我夫にばかりサモ大事そうに冊いて、友達づきあひの義理も情も知らぬ細君、そんな利巳主義な、個人主義な奴は僕は嫌ひだ。そんな貞女や賢母よりも、僕は却つてあのヲバさんの様な、濶達な、社交的な婦人が好だ。オヤ是は圖らず議論に陥つた。僕は只だ事實を君に報すれば足れり、評論は僕の任に非ずだ。

◎モ一つ是非此の通信中に缺く可らざるは、散髪屋の熊の事だ。彼は其弟の辰と共に一生懸命に勉強して居る。然し幾ら勉強したつて散髪料は金四錢だ。一時は物價騰貴と共に六錢までせり上げて居たが、同町内に競争者が出來たので、又忽ち元の四錢になると同時に、顔に浪の打たぬ鏡を一面新たに懸けかへて、床板も張替へて、草花の鉢の一つも飾る様になつた。是丈の事なら何も態々君に通信するにも及ばないのだが、彼にも亦た女房が出來たよ君。君は覺えて居ないかも知れないが、六丁目の鍛冶屋の子で、ちよつとビツコの、お夏といふ小い娘があつたじやないか。あれが君、チヤアンと熊の女房になつて居るのだ。そして其頃から少とも大きくならない様で、今でも實に小いものだ。身長約四尺五寸といふのだ。然し『美い女房、小女房』といふ諺があるほどで、其の甲斐々々しげに襷をかけて、歯の高い下駄をはいて、少しづヽビツコを引きながら立働いて居る處は、實に又一種の風情があるよ。顔立はそんなに惡くはない。其の二皮目に笑を含んだ時など、痩せた石竹の花の一枝を見る様な心地がする。

『熊さん今夜ア何いするかな』など、お直が夕飯の菜の相談をすると、熊は客の頰の邊を剃りながら『大根でも煮とけ、髮摘にやア鰯も食はりやせん』など、膨れて居る事がある。彼れも中々苦しいのだ。

◎君は何時やら永井君の消息を聞きたいと云つて寄こしたね。永井君はあの時分からの肺病であつたが、豐津の村と共に、彼れの一家と共に、彼れの一身は段々に瘦せ盡して、一昨年の暮、とう〳〵死んでしまつた。

◎馬場老先生はまだ生れて居るよ。八十六歲で糠漬大根をパリ〳〵やると云ふのが大自慢だ。そして實際それ以上の物は食べられないのだ。あの一家も不仕合つゞきでね。

◎然るに、我々の故山が斯く瘦せ盡した間に在つて、猶ほ善く肥えた家が二つある。北海道のアイノの中にも二三の富豪があると聞いたが、凡そ如何なる社會に於ても、多數の瘦せる處に必ず少數の肥える者がある。豐津の高原如何に瘦せたりと雖も、猶ほ是れ近隣數村落の中心を成して居る。此の中心に立つて大小の管を八方に通じ、之に依つて膏血を吸收する時は、如何に稀薄の血、些細の膏と雖も、積もり積もつては相應の富を作すのである。されば二つの肥えたる家とは誰ぞ



や。曰く廣島屋、曰く濱田家。廣島屋は豐津の町に於ける最大の商店で、呉服屋たると同時に、荒物屋であり、小間物屋であり、油屋であるといふ事は君も知つて居る通りで、近來は著しく奇麗な店になつた。廣島屋の主人は此の近隣に於ける商權を全く其掌中に握つて、今や朝日の昇るが如き勢ひである。村會の議事の如きは、一に彼れの意志に依つて決せられるのである。彼は此小地域に於ける商業界の覇王である。次に濱田家といふのは濱田平太郎（仇名は平カン）の家の事だ。昔し僕等は、あの平カンが雉子擊の名人であると云ふ事の外は、何んにも知らずに居たが、彼は近在の百姓に金を貸付けて居たのである。田地を抵當にして金を貸付けて、殘酷非道な事をしてドシ〳〵と抵當流にしてしまひ、瞬く間に彼は大地主となつたのである。斯くて豐津の瘦松原にも資本家と大地主とが立派に出來た。經濟界の當世風はこんな田舍にまで吹きすさむのだ。猶は濱田一家の内情に就ては、實に面白い、實に馬鹿々々しい、而して實に悲慘な事共があるのだけれど、あんまり長くなるから次の便に殘して置かう。丁度今荊妻が歸つて來て、僕の留守番の任務も終つたから。

（次號へつゞく）

# 日本婦人の貞操を疑ふ

中尾傘瀬

余歴史を讀みて、日本婦人の貞操を疑ひ、其最も痛恨に堪へざるものは、垂仁の后サホヒメの言行なりとす。初、后の兄サホヒコ異志を抱き、后に問ふに、兄と夫と孰れを愛するやを以つてす。こは后に取りて甚だしき難題にてもあらざりけむ、后は輙ち「兄に若くなし」と答へらる。サホヒコ依つて匕首を授け、后をして竊かに帝を刺さしめむと謀る。帝一日、后の膝を枕にして眠りたまふや、后兄の依囑を思うて懷に匕首を探り、未だ逡巡して涕涙先づ滂沱たり。帝驚き醒めて曰はく、夢に雨佐保より來たつて朕が面に濺ぎ、錦色の小蛇朕が頸を遶る。これ何の象ぞ。后秘するによしなく、伏して悉すに實を以つてす。帝乃ちヤツナダをして、サホヒコを捕へしむ。サホヒコ稻城を造りて拒ぐ。后亦妊めるにも拘らず、宮を逃れて城に入り、兄を緊はむとす。對陣漸く久しくなりぬ。ヤツナダ遂に火を放ちて攻む。后城中に生む所の皇子を出だしめて、兄と共に焚死す。これ紀記のしるす所。余はこゝに數個の疑團を生せずんばあらず。彼女は

何故に夫より兄を愛すと答へしぞ。

何故に兄の依囑を受けて匕首を蔵せしぞ。

何故に帝を膝にして涙を流しゝぞ。

何故に妊める身を以つて兄の城に赴きしぞ。

これ實に解し易からざる問題ならずとせむや。從來多くの史家は、皆彼女の貞と悌とを讃め稱へざるなし。大膽なる『二千五百年史』の著者と雖も、彼女を「標本的日本婦人」と崇めたり。あゝ果して然るか。貞悌兩全を希ひたる彼女は、宛も忠孝兩全を得むとして、自ら死を祈るに至りたる重盛と相似たるを見る也。斯くの如き道德は、倫理上何等の價値なし。否寧ろ不貞の最も甚しきものにあらずや。蓋し『二千五百年史』の所謂「標本的婦人」の語は、此意義に於いて用ゐらるべき歟。

次に疑ふは、常磐の態度にありとす。初、常磐の母

の捕へらるゝや、彼女之が宥免を乞はむとて、三人の兒を携へて淸盛に到りしが、却つて彼の爲に强ひられて、其愛する所となれり。而して母と三兒とは、即ち安全なるを得たりき。これ母と子とに換ふるに、貞操の犧牲を以つてしたるもの。此場合、彼女に在つて母と子との償は、貞操よりも尚重かりし也。然り、唯それだけなりしならば、既に貞女兩夫に見えずとの訓誡を拔きながらも此行爲を是認したる『義經記』の記者ありと雖も、彼女が淸盛の寵衰ふるや、出でゝ三たひ一條大藏卿長成に嫁せしに至つては、其眞意の那邊にあるやを知るに苦しむ也。あゝ前には母の爲、子の爲、泣いて淸盛に從ふけしきを示し、後には即ち平然として第三の男子に行く。もはや『義經記』の記者――此一事を記さず――も、當時の道德も、いかで之を許すといふべけむや。

今試みに彼女を忠興夫人と比較せば如何。更に研究の趣味饒かなるものなからずやは。抑々常盤は母と三兒とを救はむが爲に、又一身の安全を求めむが爲に貞



操を捨てたり。忠興夫人――彼女は殺すか、勿れか、の教を聽ける天主教信者なりしといふにも拘らず――は、夫の面目と已の貞操とを全うせむが爲に、忍んで二人の兒を殺し、併せて己の身をも殺したり。余は我邦貞女道の婦人として、元より後者を推し、前者を貶すに躊躇せざるものなり。余は常盤に於いて、對淸盛の場合に、貞操と母子の生命（若しくは一家の恢復？）と孰れか重きやといふ問題、及び對長成の場合に、貞操と一身の安全と孰れか重きやといふ問題、相結んで解けざりしを想ひやらざる能はず。然も忠興夫人に於いては、一家の斷絕も、二兒の生命も、已の生命も、すべて貞操には換へ難しとしたる嚴烈なる貞女道の信仰を見る也。むゝ恐くて常盤に取るべき所は何ぞ。やぶれかぶれの身を用なき捨鉢に放下したる一般市井の婦人と撰ぶなきものを剩すのみにあらずや。余は之を思うて、本邦歷史に一大變革の時期を劃したる賴朝の事業に翼贊の功多かりし義經の母たる人の爲に、一掬憐愍の淚を禁ずる能はざる也。

常盤に關して一奇説あり。清盛の妻次子を生まむとするや、清盛の願ふ所は男兒にてあらむことなりき。然るに生みし所のものは女兒なりければ、俄かに京都の市中を索ねしめて、同日出生の男兒を、傘屋法橋の家に得、窃かに女兒と交換して育てしものこそ宗盛なれとは遍く人々の知る所。而して傘屋に托せられし女兒は、長じて美人の評高かりければ、九條院（近衛女御藤原呈子）入内の時、町家の娘千人の中より特選せられて宮仕するに至り、後義朝の妾となりしにて、是れ即ち常盤なりといふに在り。されば清盛と常盤とは父子にてありし也。

次に疑ふは袈裟に在りとす。彼女は源渡の妻にして、遠藤盛遠に迫られて、不義の褄重ねを爲し、更に盛遠と謀りて、夫渡を亡きものにせむと定め、盛遠をして酔臥せる渡を殺さしむべく約し、忽ち耻ぢて、みづから彼の刄に斃れしもの也。（盛衰記、長門本平家物語に據る。）是れ豈貞操たる婦人といふべけむや。其死は固より自業自得なるのみ。殊に彼女と盛遠とは、夙に從兄妹同士の許婚ありし間柄なりしものを、母の人、目前の都合にて、さきの約束を忘れて、濫りに彼女を渡に與へしものなりといふに至りては、「親の爲には、さらぬ孝養をもする習」とあきらめて、盛遠に從ひし袈裟の貞操は、初より疑を挿むべきものならざりしや。余は當時の貞女道に顧みて、憫憐たる能はざる也。（然も此事實は後世種々なる文學の爲め誤り傳へられて、我邦に於いて美化せられたるのみならず、明治に至りて、遂にアーノルド氏の詩筆を通して、遠く海外の劇壇にまで喧傳せられしとは、實に案外千萬にして、かの同氏の『喇叭卒』の詩と共に、飛んだ誤を攪めしものと謂ふべき也。）

抑々彼女既に一身を滅ぼすの覺悟ある者ならば、何ぞめゝしく一夜なりとも盛遠に從ふのいはれあるべきや。國粹論者はこゝにも日本婦人の物に逆はざるやさしさを認むべしと言はむも、こは婦人の意氣地なさ、果斷なさを覗ふしるしたらずや。否、彼女が渡との結婚は其成立の初に於いて、母權に屈從したる戀愛の棄却、貞操の無視を存する也。何ぞ後年許婚者にてもあり、渡邊の黨第一の荒武者にてもありし盛遠の威迫に逢うて、潔く反抗の態度に出づる能はざりしを怪しまむや。惟ふに彼女は盛遠に威迫せられて、曾て許婚者を捨て

し不面目と、今眼のあたりむくつけき荒武者を見たる恐怖とに、身を投げ伏して、何うとでもしてよと絶え入りしものか。深遠の亂髪はこゝに論ずべき趣意にあらざれば略すと雖も、こはこれ今日新聞の三面を塡めて珍しからぬ様ならずや。誰か之を以ッて史を飾るの事實とせむ。あはれ日本中世の女性史は、彼女の爲に一大汚點を附せられたりと謂ふべき也。

以上の三夫人は日本史上の最大なるものならずと雖も、亦著名なるものなりといふを妨げざる也。而して其言ふ所や、行ふ所や、皆斯くの如し。余は日本婦人の貞操を疑はざらむとするも能はざる也。わが讀者よ。今姑く余が續くる所を聽かずや。

余は既に史上著名の三個の女性を拔き出だして、之を沙汰したれば、余に於いては最早充分なりと雖も、尙讀者多數の滿足を得べく、少しく古史に溯り、近世に下り、更に數人の余が說を證據立つるに足るものを擧ぐべし。

○スサノヲの命が、簸の川上にて越のヲロチを夷げ、



彼に啖はれむとしたるクシナダ姫を救ひ、之を妻としたるは、これ唯古史にあらはれたる掠略結婚の顯著なる一例のみ。命は豫じめ姫の兩親に約束して、「彼女を我に與へよ。然らばヲロチを擊ちて姫を扶けやらむ」との條件下に、彼女を救ひて妻と定めしもの。其間豈戀愛あらむや、貞操あらむや。

○天孫ニヽギの命が、木花咲耶姫を見て、婚を求めし時、姫は「吾は得白さじ。吾が父大山津見神ぞ白さむ」と答へしを知らむ。國粹論者は之をも辨護して、姫の正しき行——後世の野合の如くならざる——を稱すべし。然れども亦一面より考ふれば、是れたゞ父權の下に戀愛の壓服せられたるもの。豈其處に貞操あらむや。

○スセリ姫は其門に立ちしオホクニヌシの命を見て、直ちに婚し、やがて之を父に告げたり。これ自由結婚の事後承諾といふものならずや。かのコノハナサクヤ姫正しからば、このスセリ姫はあやまれりと謂はざるべからず。殊にスセリ姫は、父の睡眠を窺うて、オホ

クニヲシと共に手を携へて逃奔したりといふに於いてをや。

○神武帝の皇后を定めむとするや、野に遊べる七人の少女を見てし時、大久米の命傍らに立ちて、誰をか撰みたまふと伺ひ上げぬ。神武「最前に立てる少女をこそ」とて、乃ち命を傳へて「葦原の繁こき小舍に、すが疊、彌さや敷きて、わがふたり寢し」の實成りぬ。即ちイスケヨリ姫にして、後の皇后なり。……

○雄略の時、紀小弓新羅征討に赴かむとするや、帝采女大海を賜ふ。これ婦人を一種のプレゼント(贈物)として扱ひたる始とす。(應神帝が、オホサヽギに髪長媛を與へたる先例はあれども、彼は天皇より皇子へ、此は天皇より臣下へ下されたる也。)これより世々つきざるの風となる。豈戀愛と貞操とあるべけむや。

○同帝の時、弟君は新羅征討に行きて百濟に留まり、叛を謀らむとするけしきありければ、妻樟姫は夫を殺して百濟より歸りぬ。忠といふものは斯くの如きものならむも、未だ貞なりとは做すべからざる也。

○ヌカダ姫は天智帝の寵倖にして、壬申亂の動機とさへなりし人。彼女亦大海人に意ありて「茜さす紫野行き、しめ野行き、野守は見ずや、君が袖ふる」と歌へり。殊に其初、天智と大海人と彼女を爭ひし時、若しい、い、い、い、い、い、い、い、彼女に眞の貞操ありしとせば、何ぞ妻爭ひの醜態を生じたるべけむや。

○藤原鎌足は、天智帝の宮人采女の妊める者を賜はりて「我はもや安見子得たり。皆人の得難てにすとふ安見兒得たり。」(萬葉集 卷二)と誇れり。安見兒とは采女の名なり。是に至りて婦人はプレゼント(贈物)よりも寧ろプライズ(賞品)といふの當たれるに若かざるを覺ゆる也(不比等以下は其腹にあらずと雖も、定恵上人は、實に彼女の所生にして、鎌足に取りて長子なりき。)

○藤原不比等の女、光明子の上は言はずもがな。

○光明子の生む所の孝謙帝は、更に言はずもがな。

○桓武對光仁の后の關係は如何。こは普通の歷史の記載せざる所なれば、少しく摘記せむに、桓武未だ太子たりし時、光仁其后と博奕に負けて、后に賭の男子を

得させよと迫られて、遂に桓武と通ずることを許されしことあり。（大鏡參照）

○平城上皇復位の運動を企てし藥子は如何。女子敗德の極に達したるを見ずや。

○清少は如何。

○和泉式部は如何。

○赤染衛門は如何。

○平安朝の大才媛、紫式部さへも「一說」に據れば、姦通の行ありし也。余は一般史家の、容易に紫式部唯一人貞操なりしが如く說くものを、未だ俄かに信ずる能はざる也。なるほど彼女が全盛道長の戀を退けたるは事實なるべしと雖も、當時の風俗に鑑み、源語の內容に照らし、余は「一說」の必ず何處かに否定すべからざる餘地あるを認めずんばあらざる也。

○平家時代に入りては、所謂二代后あり。彼女は近衛帝の后多子の、再び二條帝の后に立ちしもの。……………………。

○清盛の母――忠盛の妻兵衛佐局――は、白河上皇の



嬖倖にして既に妊めるものを、上皇より、女子を生まば朕取りて育てむ、男子ならば汝之を養へとの條件附にて、忠盛に下されしもの。これ天智の例に傚ふもの。

○父鳥羽帝の子に當たるべき崇德の母璋子は、初白河法皇の宮に養はれたれば、時人既に白河と璋子との間を疑ひ、鳥羽も亦崇德を子として視ず、叔父兒とよべりき。（古事談參照）璋子の態度は、單に當時の宮中生活を語るに過ぎずといふ乎。

○勾當內侍は、後醍醐帝より義貞に下されしプレゼントにあらずや。

○辨內侍は、同帝より正行に遣はされし御褒美にあらずや。唯正行の之を辭せしのみ。「假の契をいかで結ばむ」とは、眞逆正行の平雄にてもあるまじけれど、彼に婦人の貞操を重んぜし意ありとすれば、洵に殊勝といひつべき也。寧ろ內侍のたやすく御褒美となるに甘んぜしを怪しとすべし。

○而して菖蒲の前は、賴政鵺退治の功勞に酬ゆる引出物にあらずや。

○千手の前は、恰も今日（もはや今日にてもなからむが。）露國俘虜の自由遊興に侍りし娼婦と異なるなき也。

○琵琶に名高き小督局は、冷泉隆房のおもひものなりしを、高倉帝に奪はれしものにあらずや。

○巴御前は、美にして勇なりしと雖も、和田義盛が強き男兒を得むとの願に叶ひて、彼が生殖の機關となりしにあらずや。

○鬼醜なりきと雖も、力飽くまで強かりし板額亦同じ。彼女鎌倉に致されて後、淺利義遠の生殖機關となり了しぬ。

婦人を一種のプレゼントの如く取扱ふ風は、今日にても尚失せずと見えたり。去三月二十九日の「中外商業」に、尾州中島郡の參事會員山田某といふは、本年七十八の老人なるが、豫て同地の町村合併問題とかに盡力して功勞ありしとて、彼が先年妻を失ひて今鰥夫なるを幸ひ、報恩の考より其老後を慰めしむべく、同國津島町の一少女漸く十六歳なるを周旋して、此老人に配せしめたりといふ。無慚なる話かな。

斯く叙し來たれば、我邦婦人の貞操といふもの——否人格といふものすら——全く蹂躙せられて、有る無きにあらずや。



是に於いて、余はなるべく歴史を離れて考へ見むとて、再び『萬葉集』を繙けば、又もや目に付く葦屋の菟名負處女の、二人の男子に言ひ寄られて、孰れに從ふも一方を悲しましむるわけなりとて、身を投せしもの。さては眞間の手古奈の、引手あまたの男子に依怙あらせじとて、これも身を投せしもの。其他櫻兒の二壯士に於ける、鬘兒の三男子に於ける、共に例の女心のやさしきものはあらむかなれども、遂に貞操なきにあらずや。否寧ろ多情なりとの譏はあらずや。また石川郎女は大伴田主を戀ひて、夜獨り忍び行き、後世の語にて所謂肱鐵の味を知られしにあらずや。

是等は過去の歴史と文學とに現はれたる「女性」の一斑なり。若しくは全豹ならむも知るべからざる也。而して皆一様に當時の男子が如何に婦人を遇せしか、婦人自身が如何に自らを處せしかを語るものにあらざるは無し。誰かは日本婦人の貞操を疑はであらむや。

たゞ僅かに上代に於いて、松浦佐川媛の如きあり。景行帝の爲に誘はれて、戀愛を得べく、其父を殺し、

可憐態婆の少女、市乾鹿文の如きあり。後世に至つて、一人完全の靜御前あるに過ぎざる也。

乃ち余は愈々歴史を捨て、更に他の文學に就きて、余が不快の念を醫さむと欲しぬ。斯くして尋ね當てたるものは、德川時代に盛行したる心中文學なりき。心中は戀愛の極致にして、貞操美の最も熱き發現なり。論者或は心中を目して、道德的ならずと言はむ。されど道德とは何ぞや。美なる戀愛は、必ず熱き貞操を伴ひ、常に道德を掩うて餘あるにあらずや。余は心中美を以つて深く自ら悩むる者也。而して亦これ余に「情死の研究」ある所以なりとす。

余瀬生曰く、余に「情死の研究」あり、數年前の舊著にして、未だ完成したるものにあらず。いづれ機を見て、公にすることあらむと庶幾ふ。又曰く、此論「歷史」と「道德」とを混同したるものあれども、今改めず。

△手をついて歌申上げる蛙かな

△夜は夜あけよ、日は日くれよと鳴く蛙



# 拳闘戯に就て

米國より　一愛讀者

△西洋にも隨分まだ野蠻な風が殘つて居ます。目下欧洲の一大問題なるモロッコ會議のありしアルセシラスといふ西班牙南部の地で、會議の終結後に、同地の名物とて彼の闘牛戯といふ野蠻な遊戯を見せたといふではありませんか。

△それとは違ふが、桑港などにはBoxing（即ち拳闘）といふ遊戯がある、之を見物する者は大てい金持で、一種の道樂になつて居る、好い席を取つて見ようとするには五六十弗から百弗位かゝる、到底回向院の相撲の比ではない。而して見物の客は勿論此拳闘に對して賭をするのである。

△拳闘場は四方に綱を回らし、下には薄く砂を撒き、恰かも日本の土俵の様な物を作る。拳者に階級があつて、階級の上の者の試合には時間を長くすると云ふ様な事は全く日本の相撲に似て居る。又アンパイヤ（行司）の指圖で兩方が突合を始める所なども相撲に似て居る。突合の仕方は、双方とも手に革袋を着けて居て、其手で以て、顔と云はず、胸と云はず、力任せに突きて突きて突きまくるのである。勿論熟練して居るから互に能く急所を避けるが、遂には亂れて鼻血を出し、或は血咲になる事がある。丸で鶏の蹴合と同じ事である。そして時刻が來れば一度休みにして、アルコールで汗を拭いたり何かして、更に再び戰闘を續ける。そして遂に一方が弱つて地に斃れるのを見て、それで勝負が極まつて見物が鬨を作る。隨分野蠻な遊戯ではありませんか。

# 貧者の心得

大石祿亭生

▼此世に金持と言ひ又貧乏人と言ふ二つの階級ある事は本來不自然な差別であつて、富者の心得と貧者の心得を別々に考ふる事も亦我々の理想に適はぬ事であるが、實際今日の社會に二種の人間が存在する限りは、特に貧者の心得となるべき事を述べるも、强ち不道理な事であるまい。偖て貧者の心得の內、最も急要なる事は何であるかと問はゞ、言ふまでもなく貧乏と言ふ境界を脫出するに勉める事、則ち勞働者の團結であるとか、示威運動であるとか、又同盟罷業などの政治的革命手段である。併し乍らさう言ふ問題は余が茲に言はんとする所でなく、唯日常貧者の心得べき事を少しく述べて見るに止るのである。

▼第一、貧者は貧乏の眞相を表白し、其悲慘なる狀態を富者に見せ付けるべく勉めねばならぬ、均しく生を此世に享けた人間として、誰しも自己の窮狀を他人に示すを喜ぶものは無からう、特に痩我慢を張るもの、常として我が缺陷は成るだけ之を隱し、上部を飾つて見せ度きは止むを得ぬ人情である、けれ共自分と同じ境遇にあるものゝ醒覺を促す爲にも、又橫暴なる富者の反省を求むる爲にも、貧乏を秘し置くと言ふは、恰も傳染病を隱して置くが如く甚だ危險な事である、故に多少の恥を忍んでも之を開放して見せると言ふ事は寧ろ貧民の義務であらうと思ふ。

▼富者なりとて必ずしも惡魔であると言ふでなし、他人が困窮の有樣を見て、良き心持はして居られず、之に多少の同情を寄せてその我儘なる振舞を改むるに至るかも知れぬ、よしそれ程でなくとも悲慘なる狀況を看過するを不愉快に感じ、我が邸宅の塀を高くするとか、或は目隱を造るとかして僅かに安心するの手段を取るに至るであらう。然るに貧乏人と言ふものは全體に負惜み强きもので、腹が減つても空腹くない顏を粧ひ、震ふて居ても寒いとは言はず、どこまでも體裁を繕ふて內部の窮狀を隱さうとするものである

▼これに就て余が一つ實驗せしは昨年夏の事である、「ア」貧民部落に一人の病兒を見舞ふたのであるが、其家は九尺四方程の物置小屋へ三枚の疊を敷いて、其疊と言ふものは表が全く破れ去つて、唯藁ばかりが殘つて居るので、其上へ薄き蒲團をのべて、骨と皮とに瘦せ果てた小供が伏して居た。片方の板間には一つの瓦竈に古びたる土鍋が掛けられ、その前に茶碗と皿と箸の様な食器が五六點無雜作に並べられてある。又後ろの方の竹竿には泥に塗れた股引と手拭と袢襦の様な古切れが打懸けられてある。余が此家へ這入つた時母と覺しき一人の女が、病兒の側に座つたまゝ俄かに容を正して表の方へ向き直つたが、之に目を注めて見ると上には袖の短い中形の襦袢を着、下には唯腰巻と前垂を巻附けたばかり着物と言ふものを着て居ないのである。斯う言ふ無躾な風體をして居るからでもあらう、彼は起ち上つて余を迎へる事も爲し得ず、故らに我子を恤はるが如く粧ひ、唯言葉を改めて「小供が惡戯をしてコンなに取散しまして」とか「暑いので斯う言ふ



容姿をして誠に濟みません」など、連に言譯をして余が來訪を謝して居た。此家に入つて一目にその哀れなる狀態を觀察し得た余は、今此婦人の言葉を聞き、更に非常の感慨に打たれたのである。此家の穢汚いのは決して小供があつて物を取散らした爲でなく、寧ろ取散らすべき物が缺乏して居るからではないか、又此母が着物を着て居ないのも決して暑いからでなく、着るべき物を有たぬからではないか。それはもう何の位隱さうとしても、明かに見透いて居る作言であるが、斯う言ふ僞りを曰ふてゞも、自分の醜い有樣を隱さうと思ふは如何ばかり可憐き事であらう。余は此親子を慰めての歸り道、これ等の事を胸に繰返して計らず暗涙に噎んだのである。

▼第二、**貧者は富者から施しを受ける事を當然と思ふべきである。**元來此施與とか慈善と言ふは語弊のある言葉であつて、同等の人間として此世に生れたものが、他人に特別の恩惠を與へると言ふは一種の侮辱とも言ふべき事であるが、實際貧富の懸隔が是程甚しく成つ

た世に、貧者が自力によつて生存すると言ふ事は到底六ケしく、止むを得ず施しを受くると言ふは寧ろ當然の事とせねばならぬ。然るに多くの貧者は此理を辨えず人よりタヾで物を貰ふを此上もなき恥辱と思ひ、勉めて之を避けて他に立身出世の道を求めんとし、半世紀前に流行したスマイルス博士の修身論などを擔ぎ出して、頻りに其敎の實行を試みて居る樣である。併ながら實際に於て勞働の權利を奪はれたる失業者に對し、職分論が何の效能があらう、生産の機關を有せざる職工にとり、自助論が何の助とならう、又空腹に迫りたる勞働者に向つて勤儉が何等の利益を與へるであらうか。畢竟獨立とか自營と云ふが如きは今日の世に於て、一種の特權を享け得たものが實行し能ふ事であつて、多數の貧者は是非とも他人に依賴して、其助けを受くる事を勉むべきである。

▼然るに今日の世間を見渡して余が最も不思議に思ふは、他人より物を貰ひ又施しを受けつゝあるは最も下層の貧民でなく、却つて中流以上に位する一種の人間



なる事である。假令へば余が地方に於て人が或事業に失敗するとか或は不時の災害に罹りたる場合に於て、賴母子講と言ふものを組織し、知己親戚より親懸として若干の救助金を貰ふの習慣がある。昔より賴母子を貰ふたものは羽織を着て人前へ出る事が出來ぬと言ふ程之を恥としたものであるが、近來は大に其趣を異にして、糊口に窮する樣な貧民は賴母子を貰ふの資格なしとし、却つて髯を生して絹布を纏ふた紳士に之を貰ふの信用ありと言ふに至つたのである。而のみならず同し賴母子講の内にも大小の差別あり、親懸の金額は一圓二圓五圓十圓或は二十圓と、貰ふ物の多きに從ひ貰ふ人の資格と信用が向上せねばならぬので、ツマり襤褸を纏ふた乞食は門前より小僧に追拂はれ、羽織を着たる乞食は座敷へ通りて主人の厚遇を受くるのである。現に余が地方出身の人物中最も秀才の聞えある某は官海に游泳するの妙を極めて某省の參事官となり、今は大坂なる富豪某家の番頭を勤めて居るものであるが、此紳士こそ我地方で最も大なる賴母子講を貰

ふたもの丶一人であると言ふは、甚だ奇妙なる現象ではないか。若しも高等官や髭女郎や羽織ゴロツキにして、人より物を夕ゞ貰ふの權があるならば、律義にして貧乏なる勞働者には更に多くを貰ふの權があるべき筈ではないか。要するに此社會を何とか改造せぬ限り、今日の貧者と言ふものは貰ふか何うかせねば到底立行くべき筈なく、隨つて法律に觸れざる範圍に於て成るべく強く圖太く出かけて、富者より物を夕ゞ貰ふ事を勉むるは甚だ穩當な事であらうと思ふ。

▼第三、**貧者は借りたものを必ずしも返すに及ばぬと言ふ事**を考へねばならぬ。元來金を貸すとか利子を取ると言ふ事が、果して正當な業であるや否やは別問題とし、返す事の出來ぬものを取らうとするは甚だ不條理な事と言はねばならぬ、所が貧者は案外潔白なものであつて、所謂宵越の錢を使はぬと言ふ氣象を現はし、負債と言ふものを一種の罪惡の樣に感じて、三度の食事を二度に減じても二枚の着物を一枚脱ぎても、甚だしきは自分の子女を賣つてゞも借金を返したがるもの



である。我々は彼の紳士の面を被つて方々を借倒し、自ら榮耀榮華を極むる羽織ゴロツキに對しては少しも同情を寄せぬものであるが、唯食ふ事の出來ぬものに返させやうとするの無理なるを信じ、之を强んとする殘酷なる法律と詐僞なる道德には厭くまでも反對するものである。尙終に及んで一事附言したきは、**貧者が富者から物を貰ふた時、必ずしも返禮を爲すに及ばぬ**と言ふ事である、此點に於ても貧乏人は金持よりも遙かに律義なもので、後者が往々貰物を取込みにして濟ますに引換へ、前者は甚い工面をしてゞも何等かの答禮を爲し、所謂義理なるものを立て通す癖がある。尤も我々なりとて全然返禮と言ふものを非認するに非ず好意を以て物の贈答を爲すは、麗はしき人情の發展として甚だ趣味ある事とは思ふが、それは十分食物を有するもの丶事であつて多くの貧者に望み得べき事ではない。故に貧者は今日の社會に行はる丶少量の慈善などに滿足せず、否寧ろ之に不平を唱へてそれ以上の物を要求し、決して返禮などの心配をせぬがよいのであ

る。斯くの如くせは金持は貧乏人を以て甚だ厚顔しきものと思ふか知らねど、元來勞働者の御陰で金持になりそれを出し惜しみするもの丶方が、どの位厚顔しいか知れねのである。要するに貧者は自分の悲慘なる状態を遠慮なく世間へ見せつけ、富者より貰へるだけ貰ひ借れるだけ借りて、到底貧乏人と言ふものは厄介なもの、貧者と言ふ階級を此社會に存して置く事は人間全體の不利益であると言ふ事を知らしめるのか肝要であらうと思ふ。

## ●深尾韶君の手紙（市谷監獄より）

△暖かくなりましたねえ。昨日も運動場で「モウ外は樂裕で結構だらう。桑の花が咲いて、雲雀が鳴いて」など吹いたことでありました。

△今年の春こそ大いに東京近郊の花に親しまうと思つて居たものを、事、志と違つて昨日今日の好天氣を、只高い塀越しに大きな桃の木を見て、「あゝモウ今日は散つた、今日は若葉になつた」と、月日の經つのを驚くばかりです。



## 實費調劑所

（竹内余所次郎君の新事業）

△本誌の寄書家にして記者の友人なる竹内余所次郎氏、は此度本郷元町一丁(濠端)に實費調劑所を起した。氏は藥劑師であるので、貧民勞働者の爲に極めて廉價に藥劑を調合してやらうと云ふのである。そして同志の醫士とも連絡して、無料診察の法をも立てたいと望んで居る。

△竹内氏の調劑所は極めて小い家であるが、風景に富んだ木造の西洋館で、チヨツトしやれた見かけである。調劑の外に、こゝで郵便切手も賣つて居る、社會主義の書類も賣つて居る。追々は之を擴張して社會主義同志の倶樂部にもしよう、消費組合の本部にもしよう、勞働者の宿泊所、公食堂にもしようと云ふ計畫である。

△竹内氏は此家に平民館といふ名を付けて居る。そして自ら曰く「諸君來て見たまへ、之は又珍らしい小さい家です、二階家の西洋造りと云へば立派ですが、上も下も疊三枚敷けるか敷けぬ程です、然し西と南とに窓があつて、明るいと此上なく、近く丁字形の道路を眺めれば、朝より夜まで行人絶えぬ間とてはなく……遙かに神田の谷から九段あたりの好風景も居ながらにして賞し得られ、霽れたる日には富士が峰の美容も見ることが出來ます、二階が調劑室で、下が社會主義書類の販賣所なんです………どうか一人でも多く知らせ合つて、處方箋を寄こして下さい」

# わが從妹の將來

久田二葉

四月七日の午後一時過ぎ、幾年ぶりで從妹の家を訪づれた。といふのも彼女の將來に就き種々の相談を受けて居たから、一度は老ひたる叔父叔母を慰め、生長した彼女にも逢ふてと、漸くけふに決したのであつた。

狹い通りを彼方へ當り、此方へ曲りなどして板塀續きの門をくゞると、見違へるやうになつた從妹は『待つて居ました』と優しく笑み迎へて呉れた。あゝ彼女は親身に從兄と思へばこそ、見る影もない余を待つて居て呉れたのである。然り彼女には同胞もなく寄るべき者も居らぬ。そうして眞實の相談相手といふものは余等の外に持たぬのである。余や新たな職業に入らうといふ過渡時代の浪人で、余自身が既に母や妻子を郷里に殘して居るやうな、憐れな境遇であるのだ。而も此の憐れな者を便らねばならぬとは、ああ彼女は何たる心細い境遇であらう。などと唯だ思ふことのみ先だ



つて、とんと言葉も出ない。されどわが從妹よ、よくもそう美くしく優しく生長して呉れた。浮き世のせち辛きつらさを嘗め、老父母を慰めながらも、その難澁のなき顏立や姿、あゝ天の恩寵は、絕えず展べつゝある惡魔の手を遮ぎつて呉れたと見える。多謝す、何時までも〳〵彼女をして淸からしめよ、そうして其優しい心から何事をか爲さしめよ。

導かるるまゝに閑靜な座敷へ通り、見覺えのあるやうな屛風額面など眺め茶をすゝりながら『分り難くかつたでせう』『けさ道順を書いて上げたのが着かなくつて……』などと話して居る中にオヂさんは出て來なすつた。叔父夫婦はもう七十幾才といふ年だから、從妹の女らしくなつたのに引きかへ、先づ老人らしくおなりだともいはうか。白い髯、にこ〳〵とした顏、どうやら亡き父の面影が偲ばれて來た。年幼き一人娘を杖とも柱とも賴み、此老年で一家數人の生活を無資產の中に支へて行くとは何たる豪氣な働きであらう。昨今自分の腑甲斐なさは、先づ茲に感服されてならぬ。

かくいろんな感想に耽つて居る中に座が定り久振の挨拶が濟むと、順序として問はるゝまゝに自分の身の變遷、境遇の遷り變りを物語つた。オヂは此不幸者を『よくそれでも堪えて勉强して吳れた』と寧ろほめて下だすつたが、內心餘りに耻かしく餘りに腑甲斐なさに今更冷汗を捻つたのである。次に約束の話は始まつた。チヂさんは先づ『手紙でも云つたやうに壽美も年頃になつたから、お前にも相談して何人とか行く先きを定めたいと思つてね！』と口を切られた。

元來此ことは詳細手紙で相談を受けて居たので、けふは余の定まつた考へを持つて來る筈であつた。しかし自分はあゝもこうもと考へもしたが、他のことゝ違つて一人定めでも困るから、一度皆と會つたその上でと、唯だ漠として來たのであつた。そうして今緣付るか、養子を迎へるか、二三年奉公にでもやつた上で考へ直すか、獨身で推し通すかといふ四問題が提供されてあるのだ。自分は『詳しく聞いては居りますが……』と答へつゝ亦も新たに心の中で講究し直すのである。



まづ養子を迎へるかよい。人、氣に喰つた人が見つかるだらうか、來て吳れるだらうか、將來は……また迎も養子とは何が爲めの……イケぬ〱、養子說は迚も贊成出來ぬ。

さらば嫁に行くか。よいところがあるか、あつたと思つてもまた普通のそれではないか、これも急いでは駄目だ、と云つてどの口も〱斷つて居るのも、末が案じられるやうにも思はれてならぬ。それに昔者の義理堅い謙遜な叔父は、こんな無教育な者を人樣に上げられぬと頑張つて居る。それに嫁ぐとすれば、後に殘る老父母をとは從妹の心配するところで、余等も同じく感ずる所である。さらば此心配のないやうな人と結婚せねばならぬといふことにもなつて來る。隨つてそれは機會を待つより外はないといふことにもなる。

次に二三年奉公に行つて世事に馴れゝばその中また……といふ說、これは余の最も感服せぬことであるといふのは、奉公とは器械になることではないか、また行儀を見習はれるといへど、人を器械にして使ふやう

なもの丶行儀とは何か、禮儀とは何か、またそんな家庭の世帶とは何事か、新時代の婦人には一々不用のものである。それより活社會を觀察し濁世に淸く處して自分等の境遇に合ふやう行儀も作法も生活法も改良し案出せねばならぬ時ではないか。此點に於ては或は舊思想と一致せぬであらう。また一致したところで、純潔無垢な少女を、迫害多き難癖多き人の家へどうして預けられやう。どうして冷たき人手に渡されやう。今の人の世は惡魔の巣窟だもの、二三年はさて措き一日半時でも、たつた一人の從妹をやつて置けやうか。なるほど世話する人にもよらう、けれど今の世の中は兄弟だとて從兄弟だとて輕々しく心を許されぬくらゐではないか、よい人、エライ人が獨身少女の前に微塵の信用だに拂はれやうか。よしまたそれを信じて使つたところで、奉公に行くのだもの、何にも其の人の傍に居る譯ではないから何んにもならぬ。なほ亦た二三年經つて後など思つて居ても、愛情の前には月日もなく障壁もないから、例へ親切な人の勸めでも斷はらずに



居られぬ。奉公に行つて器械になるくらゐなら家に居て勉めたら生活の手傳も出來、老父母も守られてどんなに人生が樂しいかしれぬ。

なほ從妹は獻身的の事業に一身を捧げ、獨身で暮したいといふ意見で、手紙の端にもいろ〳〵と書いてよこしもするが、自力は其每度に斯樣なことを志すに至つた彼女の境遇を憐み察したのであつた。そうして二十歲前後の女子の心がけとして餘りに氣高く、餘りに犧牲の大なるのに感服したのである。されど、あゝされど或は彼女に心を許す靑年のあつて、其の切なる思ひを貫き遂することが到底出來ぬとみての決心ではなからうか。若しさらば從妹よ、何を隱すに及ばうか、皆な此兄に打明けて吳れ、滿足に行かぬまでも又なんとか工夫も手段もあるであらう、そんなことを共々に心配し合ひ相談すればこその一人の從兄ではないか。

併し又た彼女が斯く迄に思ひつめるのは、尤もなことだとも首肯れ、同情に堪へぬ節もある。嗚呼彼の女

の姉は何故に世を去つたか、明治式の結婚の犧牲となり、人の妻となること五年、遂に離縁せねばならぬことに立ち到り、父母の許へ歸りは歸つたが、此悲しさ悔やしさに悶え病ふた末、遂に命を奪はれたのではないか。また彼女の從姉も二人の子まで持ちながら、それに分れて離縁の憂き目を見、なほその日〳〵の生活に逐はれて居るではないか。なほまた彼女の親友にも、嫁いだと思つたら妻は別にあり、自分は下女であつたことを自覺して歸つて來たものも居るではないか。世の中の多くを知らぬ少女の身で、親しき僅かの間にも斯く樣々悲慘な事情の多きを觀て、どうしてやす〳〵結婚などに同意されやう。獨身主義を稱へるといふのも諒とすべきで、余はしみ〳〵彼が無垢なる心根を憐むのである。

さらば獨身で推し通すとするか、普通の若き婦人が之を實行するのは難かしいといふより、寧ろ危險で堪らない。ともすれば一身を破壞させること犧牲的結婚より甚だしい場合が出て來まいか。なるほど事業に身



命を捧げて居るから多少慰められもするだらうが、四十五十の老孃が……と今から寂莫荒寥の生涯が眼前にちらつく。且つまた今の世の中では身命を捧げて奮鬪しやうと思つたとて、其のやうな職分は中々得られぬ。また世が開らけるに對して獨身者に便利なやうになるだらうともいふが、まだ〳〵そんなことを當にして居ては仕方がない。さて然らばどうしたものであらうかされど、余の考は自づから定まつた。そうして漸く口を開いた。

『オヂさん！あなたのお力で今迄こうして來なさつたものだから、もう暫く此儘に我慢なさつたらどうでせうか。生活の方の手傳としては壽美さんが手に叶ふ丈けの内職でもなさつたらどうです。私等だとて何時も浪人でないから其中亦たよい工夫も出て來ませう。それに看護婦でも敎員にでもなられれば、試めしにやつてみられるもよいでせう。さすれば其中オヂさんオバさんの幸福なやうに、また壽美さんの將來も都合よく定められるやうな場合が來るに違ひない。いろ〳〵考へても見ましたが、これより外には思ひつけませぬ。

と、自分は此意見を叔父に訴へると同時に、また天が必ず此の考へ通り、よき機會を從妹の一家に與へ給ふやう、只管祈るのであつた。

　すると壽美子は顏を上げ『そうして下されば私もどんなにでも勉めますわ、それに從兄さんの仰有るやうだと、どつちにでも進まれて、當りさわりがなくてよいだらうと私も思ひますと云つた。すると叔父叔母は口を揃へて『私等もそうは思はぬでもないが、年頃の娘を何時迄も〳〵老人の傍に引きつけて置くと世間の手前も異に思はれて……』と仰有つたが、叔父は更に開き直つて『そうさな、矢張お前のいふ通りがよいかも知れん、世間〳〵と云つたとて、そんなことはどうでもよい。大事の娘の生涯には變へられない。なアにそうと定めれば心配はなく、また神佛人殺さずだ、愚痴をいふたり取り越し苦勞したつて仕方がない』と。あゝ二人の長子に先だゝれ、末の娘一人を便りとする七十過ぎた老人の言として、何たる元氣な言葉だらう。予は此の叔父の豪宕な意氣、堅忍な心懸けに、今更感服されるのである。

　それにしても我が從妹の將來、山あり川あり陷穽ある其の前途、我は唯だ幸多かれと祈つて別れた。



# なまけ者の福音

秀湖生

（一）

　暮春の麗かな日がキラ〳〵と新葉若葉の間からもれて、灰色の欅の若芽と、鳶色の楓の若芽とがソヨ〳〵と風に戰いで、木立の間から苗代の田圃が遠く見渡さるゝといふ樣な處へ椽臺でも持ち出して、新茶の馨しいので厚燒の鹽煎餅でも食べて見たいな。但し團子坂の菊見煎餅が好い。

（二）

　窓をあけると菜の花と麥の綠が、曉の霧に包まれて印象主義の油繪を見るような景色を、輕いサツパリとした薄團の中で足をのばし乍ら見て居ると遙かに鶯の聲が聞えて來る、春は曉の鐘が晩い、ゴーンと寢ぼけた樣に響いて來る、こんな時にはア、今日は太陽が昇て與れなければ好いがなあと思ふ、但し此部屋は一人でなくちやあいくまい。

(三)

涼しい夏の夜風が椽端から續いて居る稻田の露を拂つて、僕のチイサイ蚊張に靑海波を織りなす時、終日筋肉の勞働に玉の樣な汗を絞つた體軀をピリヽとする樣な行水で流して、あをむけに大の字になつて寢て見たいな。蛙の鳴く聲、みゝずの歌ふ聲、宏壯な邸宅なんかに住む人は馬鹿だね。

(四)

底は小石がきれいに見えて、玉を溶かして流した樣な溪の淸水が鮎やハヤの走るのをあざやかに見せて、裾をまくつて兩脚を入れるとヒヤリと腦天にしみるやうな處で生蕎麥をひやして喰べて見たいな。蕎麥は更科も惡くはないが、寧ろ田舍のが好いね。

(五)

僕はとろゝを飯にかけて食ふのが好きだ、ほうれん草か、ちしや菜のしたし物位で他に何にもいらない、只とろゝを食ふには惡口を云ひ乍らが好いね、火鞭會の七勇士、凡人社の二勇士なんかは最もとろゝ會に適當して居るね、由分社の諸先生は少しハイカラでいけない。

(六)

味噌汁は愛山先生が好物で、どんな朝でも味噌汁の調味が惡いと大に憤慨せらるゝそうだ。僕も味噌汁は大好物だ、夏でも朝これが無くつちやあ何だかもの足らぬ氣持ちがして仕方がない、けれども東京の味噌の惡いのには閉口だね、本鄕なんと來たら話にならない、芝の『四方』といふ酒屋は古いもんだが、流石に味噌の味は好い。

三州味噌は百合根を入れて喰べるのが好きだけれども、どつちかと云へば田舍味噌に葱、午蒡なんかを入れたのが好いね、それから鯉コクはあんまり好かないから妙だ。

(七)

僕は性來味感が發達して居て、嗅感がにぶい、けれども『季節の香』を感ずる事は甚だ鋭いから妙だ、春の香、秋の香、夏の香、此三ツは明瞭に意識する事が

出來る。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。といふ歌があるけれども、晩夏初秋の交に於て僕をして『ハ、ア秋が來たな』と思はしむるものは一種いふべからざる『秋の香』である、たとへば土用も過ぎて朝な夕なの露が漸くしげくなつて行く頃、讀書をやめて燈火を細めて窓をあけると、浴衣にはチト寒い夜風がそよ〳〵として、雨のやうな蟲の聲と共に何處ともなく自分にせまつて來るものは『秋の香』である、此時僕はキツト思ふ『ハ、アもう秋が來たな』『夏の香』は土の香と、若芽の香と、草の日に燒ける香とが一處になつて、風につれて何處ともなく迫つて來る、これを嗅いて居る僕の耳にはもう風鈴の音が聞えて居る、晝顔の花の咲いたホコリ臭い田舍道が思ひ出される。

僕は季節では冬が一番好きで其次が秋だ、夏も決して惡くはない、燒き殺される樣な日でも一種の妙な反抗心からして隨分仕事が出來る、僕の最も嫌ひなもの



は春だ、春風は僕にとつて尤も聊頼なきものである。慾をいへば晩秋初冬が何よりだね。

（八）

果物は何でも好きだ、葡萄を喰べると何だか自分が急にリコウになる樣な氣がする、そこで僕は葡萄が一番好きだ、其次は蜜柑だ、學校でも汽車の中でも蜜柑時にはキツト持つて居て甘い露を吸ふて居る、可笑しい樣だ。

亞米利加の蜜柑や林檎を見る度に、僕はこんなのが珠數なりになつて居る村の景色は實に好いだろうと思つて色々な風景を想像して見る、『黄金の秋』といふのだろう、日本の詩歌にはまだ果實の美を詠じたものはないようだ。

枯川兄の文章のうちにこんな句があつた、

例へば眺めよき山畑の、花園の中のテントの下に、露滴きキヤベツの葉にもられたる、紅の玉の草苺を、同志、友人、夫婦、情人、笑[illegible]寄つて喰ひ乍ら、我が聖職の傳

中附 一

米國哲學博士 テーロル原著
早稻田大學講師 五十嵐力譯補

# 兒童之研究

クロス綴上製美本 定價金壹圓 小包料拾錢

原書は米國の哲學者テーロル氏の名著、兒童研究に關する確實穩健なる書として久しく歐米の學界に推されしもの、今や吾が五十嵐氏の譯筆に上りて原文の理說趣味兩ながら遺憾なく傳へらる▲兒童敎育の意義方法を會得せんと欲する者、乾燥難解なる飜譯文に厭ける者、科學的文章と文學的文章の調和に志ある者、美はしき家庭を造らんと欲する者、人性の芽生に美はしき花を咲かせんと希ふ者は此光彩ある文學的科學書を讀め、

中村春雨解說 松井昇畫

# 畫解 キリスト物語

一冊 金十錢 郵稅二錢

上等帕來紙極彩色石版刷全紙三十二頁

幼き者に心靈の滋味を與へ敬虔の念に富ましめ宗敎的觀念を養はんが爲にキリストの一代を畫解して高尚優美なる石版刷とし之に平易なる解說を施したるものなれば小兒の讀物として家庭に缺ぐ可らざる絕好のものなるべし

# 早稻田文學

一冊廿錢稅一錢五厘
一年前金二圓四拾錢

第五號出づ（第一號以下重版成る）

巻頭小說 借の人 二葉亭四迷譯

# 家庭の讀物

菊池幽芳 小說 妙な男（二冊） 各六十錢 郵稅八錢

中村春雨 小說 無花果（十版） 金七十錢 郵稅八錢

同 小說 密航婦（新刊） 金七十錢 郵稅八錢

佐野天聲 小說 露の曲（新刊） 金六十錢 郵稅八錢

柳川春葉 小說 緣の糸（新刊） 金六十錢 郵稅八錢

尾上新兵衛 摘木淸方主幹

こども雜誌

# 月刊 オトギセカイ

每月一回 三日發行 全紙十六頁極彩色石版摺

一冊五錢稅五厘
一年前金六十錢

# 家庭の讀物

須藤南翠 小說 間一髮（新刊） 七十五錢 郵稅八錢

大倉桃郎 小說 琵琶歌（四版） 金六十錢 郵稅八錢

木下尚江 小說 火の柱（十二版） 金卅五錢 郵稅六錢

同 小說 良人の自白（三冊） 各卅五錢 郵稅六錢

鳥居君子 文藝 上總のやどり（新刊） 金二十錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地 金尾文淵堂

明日を計るといふが如き、聊か理想の片影を宿したる、小社會を見る事は出來ぬであらうか、諸君。
それかあらぬか枯川兄は此以前からイチゴハイハラの浮名を流して居た、僕は覆盆子を喰べる毎に、遠い――遠くもないが、――少年時代の事を思ひ出して、故郷の夏のうろこ雲に空想の翼をはせるのが例である覆盆子といへば、戸塚から目白停車場に行く汽車道の兩傍に、夏草のしげみに交つて自然に赤らんだのを見出した事があつたが、其時の嬉しさは未だに忘られない。

(九)

草花は日本種に限るね、西洋のものは大かた嫌ひだ、それから草花の美を索めんとする人が遠い北國の山を分けたり、嶮しい巖を攀ぢたりするのはおかしい、むさし野から相摸路へかけて草花は實に夥しいもので、市外に一歩踏み出せば大方索めて得られぬ花はない。

草花は秋のものだとは誰もいふ事であるけれども、僕は實際草花のさかりは暮春初夏の交であると思ふ。



僕の一番可愛いのは撫子の花、それから野菊、龍膽、せんぶり、鷺草、嫁菜、草萩、濱豌豆、櫻草、あざみ、女郎花、なんかの自然に咲いたのが好い。

(十)

海岸のけしきは夕ぐれが好いね、ユーゴーであつたか青年は夕ぐれを好むといふような事を書いて居た。鎌倉の海岸を散歩して見ると日本の令孃や奥樣は海濱の波打際に佇んで水平線の夕照を眺めて居る、西洋の婦人は老若うちつれて、汀に近い砂山の頂上に昇つて、暮れ行く海を眺めて居る、自然美を觀ずる趣味の相異は此間にも窺はれる。

## ●深尾韶君の手紙（つゞき）

△音樂すぎのボクに取つて今日此頃の慰めは監房の窓に朝な〳〵音づれて來る雀の聲、鳩の羽音、只是だけ。時々鳶の聲も聞えますが、其時には、いつも口の中で堺さんの「四人半月天を見ず」を思ひだしては低吟するのです。

△そして毎日々々どこからか學校の小供の愛らしい唱歌の聲が聞えて來るのですが、其時がボクの一日中の一番嬉しい、そして何とも云はれぬ感じ―寧ろ涙を催すー に打たれる時なのであります。

# 人情なき教育者

曲川生

◎先日某縣では男女兩師範學校の生徒が書面の往復をしたとかで一時に男女學生四名の退校事件が起つた。其地の新聞記者が校長を訪うて事の次第を訊ねたれば「まだ醜關係は成立して居なかつたは確かです、しかし情交のあつたことは取上げた書面の文句で分りました」と云ふ、「それなら唯それ丈なら立派に優等で卒業すべき筈であつた生徒を卒業前日に退校處分にするはちと殘酷ではありませんか」と切込むと校長は冷淡に唯「不都合があつたからです」と答へた丈けだと云ふ。文句を一々記臆せぬが兎も角以上の意味の記事が其地の新聞に掲載してあつて、それに就て何の正誤もないから先づ右記事に誤りがないものと見て差支はない。但し右の記事に誤りが果してないとすると其記者が書いた如く校長の答は洵に冷淡と云はねばならぬ。情交が成立したと云ふ丈けで退學の處分をするならば、以



來人間の情のある男女は一切入學せしめないことにする外はあるまい。普通の人情のある青春の男女を收容して居て、それで情交即ち退校と云ふ、右から左りの處置をとるのには、現實の教育者は余りに權威が乏し過ぎる。權威の乏しき者が出過ぎた事をするのは僭濫と謂はねばならぬ。

◎予は今必ずしも此一事に僭濫呼はりをするではないが、女學校などでは信書の秘密は少しも保たれないで、舍監には隨意に生徒に來た信書を開封する權利が與へてあるとのことだ。之に就ては滑稽とも法外とも批評の言葉なき僭濫の實例がある。之は或地方で裁縫講習所を郡立にして設け、小學教員の免許狀なき裁縫教師を收容して裁縫の教授法などを講習したのに、其講習生を一定の家に寄宿せしめて、數ヶ月間二人の舍監に之を監督せしめた。處が講習生は概ね既婚婦人で夫々留守中の夫たる人から信書がくる。之れを一々舍監（二人とも未婚婦人）が會釋なく開封して彼此と批評をする。充分批評し盡した上で受取人たる講習生を喚んで

忌味や冷かしやを澤山ならべて渡したと云ふのだ。夫から來る妻への信書、それを一應の挨拶もなく無斷で舍監が開封するのだ。法外と云はうか、滑稽と云はうか、しかも此舍監は縣立高等女學校の教諭であるのを思へば、現今の教育者と云ふものがどれほど沒常識で、潜濫で、男女又は夫婦間の人情の神聖を無視して居るかがよく分るではないか。舍監が信書の開封をするのは生徒取締上、必要なりと云ふのであろう。情けない考へかな。

◎昨年日比谷騷擾事件の當時、戒嚴令が帝都に布かれた結果、要所々々の通行人の懷中を（稀には跨の下まで）警官が檢めたことがあつて、警官が當然の職務上之をするだに予等はぞつとしたのであつたが、豈圖らんや教育者がもつと／＼上越した檢め方をやつて居るのである。『懷中や跨下を檢める』と『信書の開封』と、知らず孰れがひどいか。日々自己の教養訓導の下にある生徒を取締るに、それ程の手嚴しき方法戒嚴令的方法を採らなければ、果して取締りが付かぬと云ふのなら、世に教育者と稱する盲昧無能な者はないではないか。而して其通りの法外且滑稽な取締の方法の下に、偶々男女間の信書の交換あるを發見するときは、それこそ鬼の首!!『何とやら見附に於て兇徒の巨魁を捕縛したり』と云ふ交番巡査の歡喜を以て即刻退學處分!!ア、生徒が現今の所謂教育者なる者に對して一點の心服なく尊敬なく感激なきは其責め悉く生徒の不埒にあるかどうか、甚だ疑はざるを得ない。

## ●深尾韶君の手紙（つゞき）

△櫻の花と云へば、此間裁判所行の時に永田町邊で馬車の中から見たのと、おみちが面會の時に持つて來たのと、そしてお手紙の中の便りで知るのとより外には何にも知らないのです。

△浮世はなれし牢屋の中にも斯く、なまなか娑婆の風が吹き込むので、有難い樣な、辛い樣な、思ひも致すのです。

△堺さんなど、ホントンにお忙しいことでせう。『生涯幾度の花』御感想御尤もです。ホントに人の子に化さく春の世は何時來るのでせう。雜誌のチラシ配りとは御奮發ですね。

△ケヤキの盆栽は病氣ですつてね。あればかりは死なせたくないものですね。もう決してホタも可愛がり過ぎますまい、可哀さうに。數へればモウ今日で三十七日、繋獄の月日も存外早く經過します。（二十日午前）

# 老友の詩

堺利彦

米國桑港にジョンソンといふ無政府主義の老人がある。二年前から予は彼と手紙を往復して友人になつて居る。予の親友幸德秋水は今桑港に在つて此老人と日夕相往來して居る。然るに此老人が或時予の娘（名は眞柄、年は四歲）の寫眞を見て、どうしたものか非常に之を愛して、眞柄にやつて吳れと云つては、繪本を送つて來たり、カードを送つて來たりした。そうして何時でも『將來の革命婦人へ』と云つた樣な意味の言葉が書き添へてあつた。それで予は其の厚意に酬いる爲に、先頃富士山の寫眞帖を一冊此老友に送つた。すると是が又非常に老人の氣に入つて、今度は詩を二つ作つて寄こした。一つは富士山を咏じたもので、一つは眞柄に就てゞある。予は此交りに深い趣味を感ずるので、眞柄に就ての詩を茲に載せる事にした。眞柄が成長の後、其の幼時に太平洋を隔てゝ斯くの如き老人の友達を持つて居た事を知り、そして自ら此英詩を讀むに至るならば、如何に多大のインスピレーションを得るであらうか。予は今より之を想うて實に愉快の感に堪へぬ。



## Written on receiving a picture of Comrade Sakai's daughter-Magara.

Such a little girl! Yet, who knows?
She might dethrone an Empire some future day;
With mind matured as in years she grows,
Her intellects light will point the way.

* * * * * *

Such a little girl! erect she's standing
Alone and fearless with wonder eyes.
Some day she'll climb to the higher landing,
Where thought in Freedom ever flies.

* * * * * *

Such a little girl! yet Liberty's fire
Will burn forever within her frame:
In the cause of Justice she will never tire,
For her blood is warm from a Sakai's name,

ALBERT JOHNSON.

## 同志堺氏の娘眞柄の寫眞を見て作れる

アルバート、ジヨンソン

只是れ一少女！されど誰か知らんや？
他年一日、彼女の身と心と共に長けて、
其の深き智慧の光に道を照して、
一帝國を覆すの時なしと云ふ可らず。

只是れ一少女！物珍らしき目付して、
恐るゝことなく眞直に獨り立てり。
何時かは自由の思想の住める、
高き臺に登る時あるべし。

只是れ一少女！而も其の體軀の中に、
自由の火は常に燃ゆべく、
正義の爲には撓むこと無からん、
堺の名に依る血の熱ければ。



## ジヨンソンとマガラ

（幸德秋水君の手紙の數節）

「君がジヨンソンに送つた富士の寫眞帖が二三日前着いて老人大喜びだ、口を極めてアノ景色を激賞して居た、直ぐに田舍のラツド先生の許へ持つて行つたが先生もこんな美觀は初めてだと云つて居たさうだ、……老人が昨日マア坊へ送る詩と富士に題する詩とを作つて出したが、此手紙と同時に着くだらう」

「彼は何でも出來るだけ日本の革命思想を助長して……殊に日本婦人の地位を高めればならぬとリキンで居る、婦人の Emancipation（解放）の問題には中々熱心だ」

「日本の新聞に社會主義者の數が二萬五千人あるとあつたのを話したらジヨンソン老人大に喜んで、何でも婦人を革命家にせねばならぬ、婦人は天來傳道者に出來てる、革命運動は一に婦人のプロパガンダ（傳道）に待たねばならぬと云つて、眞柄坊の寫眞を持つて來て、此ベビー（子供）は顏が餘程インテリゼント（怜悧）なとを顯はして居る、立派な革命婦人になるだらうと云つて居る、彼は非常にアノ寫眞を愛玩して居る」

# 小説 猫の爪

西村渚山

花は八重に名殘を止めて、彼所此所の若葉、朝からしと〳〵と人の心をとろかすやうな小雨の降る日であつた。丁度日曜の事とて、何時客を喜んで迎へるT生の家には正午過ぎると、例に依つて四五人の若者が踵を接して集つて來た。其の中、二人は既婚者、他はすべてまだ妻と云ふものを持たぬ人達であつた。

T生は無論此家の主人ではあつたけれど、奥樣は今にない。年齡は二十七、學校を卒業すると直ぐにある民間の商社に身を賣り、三十圓足らずの月給で日々の生活を立てて居る。家族は六十幾歳と云ふ聾の母親と、十程下の妹との二人、活計向きの不如意はあらうが、併し平和と云へばこれ程平和な境涯は先づないと云つても善い。T生の部屋は座敷の六疊敷で、片隅に置かれた一閑張の小机、其上には商賣柄丈に、會社法、商法釋義など云ふ四角張つた書物が重つて見える。硯



箱の水入に白躑躅が一輪笑つて、友禪の美しい肱突と相照應して居るのは、何と云ふ風情であらう。總じて妹を持つ人の幸福は、存外微細な所に發見されるものである。

主客は室の中央に圓を描いて座つて居る。既に番茶の小土瓶は幾度か換えられ、ボールドの折に入れた儘のビスケットも、餘程食べ荒らされた樣子らしい。孰れ若い連中の寄集り、語らふ間に物凄い程の氣焰もあれば、空想澤山な大抱負を吐くもある。初めは藝術、宗敎、理想の高きより、下つては時事の諸問題、美術展覽會の話、大久保の躑躅の噂、一轉して女子敎育の評論に及び、女學生の風儀云々の事に至り、最后には兩性問題のきわどひ處から、青年男女の戀情と肉慾の極致にまで進んで、思はず一座の感興と好奇心とを惹起し、期せずして各自は一種の意味ある眸を交はし合つたのである。

T生の傍に居て、以前から一番冷靜な態度を取つて居るらしかつた一人の若者は、此時斜向ひの既婚者0

生に言葉を掛けて、

『家庭上の事には、僕等は丸て啞者も同樣だけれど、斯う云ふ問題になつて來ると、お氣の毒乍ら僕の繩張内だ。君達には既に過ぎ去つた夢に屬して居るからねえ。』

と調戯ひ初めたが、O生はそれにも係らず眞面目になつて、

『事實は過ぎたか知らぬが、研究は飽く迄もしなければならぬ。丁度幸ひだ。君は君自身で繩張内だと自稱して居る位だから、定めし周密な研究がしてあるだらう。研究と云ふよりは生きた實驗談があらうと思ふ。それを一つ聞かし玉へ。』

『實驗談?』若きバチエラーは流石に愕いたかして斯く繰返した。一座はどよめき出した。

『僕に何の「事實」があらう。只未婚者には戀する權利があり。一旦戀すれば其の戀の神聖を保つ丈の責務があると云ふ程の意味で云つたのさ。』

O生はにこやかに笑つて、



『君は自殺したのだ。其樣な辯解が何にならう。』

此時まで默して一言も口を利かないで居たT生は、不圖其物優しげな顔にセンチメンタルの色を浮べて、

『諸君』と叫んだ。

『O生の自殺呼はりも面白いが、「一旦戀すれば其の戀の神聖を保つ丈の責務」と云はれた獨身生君の一語は、痛く僕の耳を貫いて、ひし／＼と胸にこたえたのである。突然此樣な事を云ひ出したら、諸君は狂氣の沙汰だと疑ふかも知れない。併し聞いて呉れ玉へ。僕は御承知の如く眞面目な人間で、虚飾を用ひる事は大嫌ひ。是迄に一度諸君にわが胸を打明けて、切めてもの罪滅しでもしたいとは思つて居たのだけれど、好い機會のなかつた結果は、終に今日に至つた譯だ。幸ひ今日は妹も宅に居る。諸君が僕の懺悔話を聞くのと同じ耳で以て、妹が心して聞いて呉れたならば、或は何等かの利益を感得する點もありげに思ふのだ。』

斯う前置して、T生は次の如き話しをしたのである。

何を隱さう、僕の過去の歴史には慙愧に堪へぬ一個の汚點があるのである。それは無論婦人に關してだ。序幕から話さねと分らぬが、僕には故郷に居る時から一人の戀人があつた。尤も、戀人と云つたとて十五六位の時代で、夫に決して深甚な意味を持つて居ない。世俗に從へば仲好しとでも云ふ所。其頃僕は小學校を卒業したばかりで、確たる目的も定まらず、只兩親の愛に惑溺して、生計の豐かなるに安心して、精神のない信仰のない、向上心のない、哀れな地方青年の鑄型の一人となつて、すこしも恥辱考へなかつた。丁度僕の家と脊中合せに、煙草だの荒物だのを商つて居る小店があつて、家内は老媼と其の孫娘との二人、孫娘は慥か僕と四つ違ひで十三、赤兒の時から兩親の手を離れ、祖母に貰はれて來たのだが、其又老人が一寸面白い人で、早くから女學校などへ入れて、盛んにハイカラ教育を施して居た。僕の家では此娘を『裏の娘』と呼んで居たが、始終遊びに來合つたり、持物の遣取りをして居る内には、互の氣心も解つて來て、親密の情は



日一日と加はり、祭禮などには無邪氣に手を取合つてお詣りをしたものだ。兩親の方でも好ましい事に思つて居たらしい。一體『裏の娘』――本名は國さんと云つた――は勝氣な方で、學校などの成蹟も大抵第二席を下らない。代りに強情で、我意を張る事の恐しさと云つたら、到底僕等は傍へも寄付けなかつた。顏が綺麗で、スタイルが馬鹿に好いので、自然他人からは羨まれる。僕も内心嬉しかつたが、お蔭で、國子は段々華美を好むやうになつた。丁度今日の海老茶袴の流行し出したのも其頃だつたが、矢張國子はカシミヤのを註文して、メレンスは厭だと云つてどうしても用ひない。其他靴であらうが、手套であらうが、國子の持物は一風變つたハイカラ物であつた。斯く云ふと、諸君は國子を餘程贅澤な節操のない娘のやうに取られるだらうが、僕に云はせると、それは萬事彼女の勝氣な性質が導き出す結果で、缺點かも知れぬが、精神の腐敗して居たのではなからうと思ふ。其内に、何時か兩親も兩人の間を薄々知つて、僕と國子とを夫婦にしやうと企

てた。無論祖母も同意で、僕等も心では大變に嬉しかつた。いや、國子の方は左程でもなかつたとしても、僕の喜びは非常なもの。彼の樣な美しい娘と夫婦になる事が出來るのかと思ふと、五體が一時に振えて來て、胸は何時も花の下で夢見て居るやうであつた。

廿歳の時、僕は周圍の刺擊に逢うて東京に上つた。敢て學者とならうと云ふ希望ではなかつたけれど、普通公民として必要な學問を脩めやうとは薄弱乍ら考へて居た。初め早稻田に這入つて、鶴卷町邊に下宿をして居たが、或日國元から到着した一通の書信を見ると、『裏の娘』も老人と共にいよ〳〵上京したとある。僕の胸はどきッとしたよ。暑中休暇迄は國子の顏も見收めだと思つて出て來たのが、一週に一回宛は少くとも見られる勘定だから、嬉しさに飛立ちもしやうではないか。理由を聞くと、生活の方法を更へる爲めに家を悉皆疊んだと云ふ。さあ、僕はいろ〳〵考へた。豫て國子の兩親は事業に失敗して非常な困難に陷り、夜遁同樣の姿で東京へ落ちて來た。それから數へると六年になるが、今日ではブリキ職人と迄零落して、家内六人が隨分悲慘な裏店住ひをして居る。或は此家へ乘込んで來るのではなからうか。

それから三日程經つて、國子より葉書が來た。按の定北品川の父親の家からである。僕は取るものも取り敢へず、其晩方國子の父の家を訪ねたが、非常な苦心で搜しあてゝ見ると、思つたよりは哀れな住居、四人の子供はごろ〳〵と犬の子のやうに轉がつて居る。父親も母親も貧に窶れて、二目とは見られない。其間に一つ僕の目を射て、眩ゆく感せしめたのは國子であつた。別れてから一年にもならぬに、身體の恐ろしく發達したこと、すらりとした姿は肉附の好いので重みが出來、眼の色と、口元とには從來に見當らなかつた一種微妙な情味が加つて居る。

『何と云ふ美しさであらう。』

僕は心では斯う思つたけれど、口へは出なかつた。國子も平常の性質に似氣なく、妙にはにかむやうな態度を見せて、何事にでもずけ〳〵口を利く彼女の特色

が、暫時の間に餘程消え去つたかに考へられた。——其後二個月斗りと云ふもの、僕は殆んど課業に手が附かなかつた。一週間、乃至二週間毎には是非一度國子を訪ね、國子も僕を訪ねてくれたが、其間に僕の胸裡に享けた愉快と云へば、實に甘露のやうなものであつたと思ふ。日曜日、僕が下宿の二階で國子の來るのを待つて居る時の心地、それは種々な事が想像せられて、樂しいやうな、心配なやうな、恐いやうな——君等にも經驗があらうが、實際口にも形容が出來ない、今日は如何な服裝をして來るだらう。笑つて來るだらうか。濟して來るだらうか。散歩しやうと云ひ出すだらうか。何か買つて呉れと云ふか知ら。菓子は何が好いと云ふか知ら、など丶取り止めのない空想に耽つては、小說を勝手に組立て丶居る。其内に、梯子段に輕い足音、トン、トン、トン、さあ來た。矢張來た。今日もまあこれで美しい顏が見られる。——

「實さん、相變らず濟して居るのねえ。」

終に國子の聲が聞える。實際國子から斯う呼掛けら



れる時には、何時でも態と書見の樣を見せて居たからである。

諸君！　僕は眞に戀の美しさと樂しさとを味つたのは此時代であつたのだよ。其所には一片の賤しみもない。邪氣もない。何處迄も天眞爛熳、清淨潔白、二人は恰も春の野の胡蝶の如く、互に翼を揃へて花の露を吸ふて居たのである。諸君！　これ迄が僕の戀の歷史の光輝ある部分だ。僕は白狀せねばならぬ。この光輝ある歷史を汚したのも亦この僕である。聞いて呉れ玉へ。先づ順序に依つて話さう。

丁度次の年の秋であつた。料らず國子等は四谷に一家を持つ事となつた。其理由は、國子の祖母が伜等と同棲するのを厭つた事と、國子がある商店に勤め口を求めて、女子事務員として日々通勤するやうになつた事と、此二つであつた。そして、僕は同時に其所へ同居する運びになつた。下宿屋に居るよりは家庭的で宜いと云ふ事も、一つの原因だが、早く國子と一所に住つて、飽く處なく戀の快樂に耽りたいと思つたのも、亦

一つの動機であつた。矢張露路の奥の、二軒長屋、何分に古い建物で、黒光りのする天井の色などを見ると、南京蟲が居ないかと私に恐れを抱いた程の家。此家から僕は早稲田へ通ふ。國子は早朝から商店へ通つて歸りは晩方の七時位になる。其間老人は仕立物などを引受けて、小使の補足を作へて居た。こゝで一寸云つて置きたいのは國子が何故に斯る職業に就いたかと云ふ點である。無論彼女も祖母も最初から此様な覺悟で來たのではなかつたが、財政上の困難は知らず〳〵此の道を取るべく餘儀なくした譯であつた。

僕の其頃の樂みは毎夜七時過ぎに商社から歸つて來る國子の姿を見る事であつた。老人は非常に國子を愛して居るので、彼女の顔を見た上でなければ、夕餉の膳を獨りで濟した事がない。七時頃と云ふと、日永時でも火がつく時分だ。時刻になると、僕は必ず書物を投出して耳を澄す。すると、露路の溝板にコトコトと云ふ音がして、表の格子戸がからりと開く。

『お祖母さん只今――』



優しい聲である。僕が此聲を聞付けると最後、机を捨てずには居られない。ばた〳〵と玄關に驅付けて、『お歸り』と云ひ〳〵其顔を見ると、高く吊したランプの光が眞正面に國子を照らして、廂髪のふつくりした形、撫肩に輕く掛つた縮緬の肩掛、華美な銘仙の着物に羽織、それのみか、奇麗な顔が終日の疲勞の跡も見せず艶々として、天女の如くに美しく輝くのである。機嫌を損じたと思ふ晩には、僕は定つて國子を引出して大通へ出る。勸工場の前へ行くと、

『國さん此度は何を買はうか。』

『有難う。實さんは眞實に好い方ねえ。妾が一寸怒つた顔見せると、直ぐ何か買はうかつて、御機嫌を取るのだもの。』

と斯様な調子、實に鋭い感覺を持つて居たものである。

忘れもせぬ其年の暮の事であつた。僕は休暇中故郷へ歸らねばならぬ羽目となつたが、其十餘日間の不在は、何となく僕の身躰から一切の血と肉とを吸取られるやうに感じられてならない。愈明日出立と云ふ前の

晩、例に依り國子を連れて、大通りを二三度散歩し、金具の附いた手套と、西洋の花簪と、それからリボン二種とを買つて遣つたが、國子の喜びは格外で、彼方から手を握るやら、お愛想を云ふやら、全く平常とは人物が變つたやうであつた。實際僕の云ふ事なら國子はもうどんな要求でも聽くかと思つた。同時に僕の心には油然としてある邪念が兆して來た。諸君！ 僕は懺悔するのである。何も事實を糊塗する必要はない。だが、豫て察しの好い諸君の事故、此上管々と下手な説明を費すのは蛇足であらう。

　僕は其翌日早々に國元へ發足した。家を出る時にはまだ國子は起きて居なかつた。いや、空眠を粧つて居たのかも知れぬ。これ丈は僕の疑問である。それから歸國して二日目、國子から一葉の葉書か舞込んだ。文句を見ると、簡單を極めたもの、即ち、

　自分を狙はれて居る事を知る迄は、猫の前でゝも友達だと思つて、鶯は聲を張上げて囀つて居ます。けれども、一旦その恐ろしい爪を見ましたら、どんな太膽な鶯でもよもや遁げずには居られますまい。さよなら。　　國子

賤しき人へ

と書いてあつた。それ以來、僕は終に國子と相見ぬのである。



## 次號豫定記事


故山の情話（下）……堺利彦
婦人新論（第二章）……堺利彦
育兒所感……中尾傘瀨
登山の感……中尾傘瀨
火に關する思想……中尾傘瀨
父の婚禮（クロポトキン自傳の一節）……上司小劍
墓場の教訓……月の輪
菜食主義に就て……幸德秋水
ハルマン氏の入獄……堺利彦


ハルマン氏は自由戀愛、婦人解放等の問題につき、極めて大膽なる主張を爲せる米國人で、予は常に好んで氏の文を讀んで居るのであるが、氏は此度其言論の罪に依り七十歲の高齡を以て入獄せしめられたり、次號には氏の肖像と其事の次第とを揭ぐべし。（堺生）

# 婦人新論

堺利彦著

△本篇は單行本として出版の筈でありましたが、色々な都合で其運びに至りかねましたので、遂に本誌に分載する事に致しました。
△第一章(本號掲載の分)は昨年十二月二十六新聞に載せたものと、大體に於ては同樣であります。
△第二章(次號掲載の分)には「人間の兩性關係」と題して、有史以前に於ける人間社會の成り立と組織とを說き、其間に於ける男女關係を見たいと思ひます。
△第三章は「歴史上の婦人の地位」とし、希臘、羅馬より中世に至る歐洲史上の婦人の地位を說き、併せて日本史に及び、女大學の批評をも試むる筈です。
△第四章は「現今社會の婦人の地位」とし、現今の家族制度、結婚制度、一夫一婦制度、賢母良妻主義、女子の職業、獨身生活、賣淫、婦人參政權等の諸題目につきて評論する筈です。
△第五章は「將來社會の婦人の地位」とし、將來の共產社會に於ける新教育制度、新結婚制度(自由戀愛)、新家庭生活、男女職業の自由撰擇等を說く筈です。
△第六章は「人間兩性關係の將來」とし、一夫一婦主義の進化、新戀愛教育、人口論等につき、稍や高遠の理想を寫す筈です。
△但し、本誌は其性質上、現在の政治に關する事を評論し得ざるが故に、本論中、或は思ふ樣に筆の運びかねる場合があるかも知れぬ。



## 第一章　生物の兩性關係

▲生物發生の次第▲無性生殖▲有性生殖▲細胞の分業▲生殖細胞の雌雄分業▲植物の生殖作用▲動物の生殖作用▲動物の團體生活▲雌雄個體の分業▲雌雄の永續的關係▲家族

曰く婦人問題、曰く婦人論、是れ皆な今の世の男子中心の態度より來る言葉である。婦人問題、其實は男女問題である、人間兩性關係の問題である。『婦人新論』は即ち人間兩性新論である。

さて此の人間の兩性關係を考察するには、先づ生物全體の兩性關係を通覽しておく必要がある。而して生物の兩性關係を通覽するには、必ず生物發生の次第と共に之を研究せねばならぬ。

專門學者研究の結果に依れば、總て生物の體は原形質と稱する、卵の白味の如き物より成る。此の原形質の最も單純なる一塊を細胞と稱す。最下級の原始生物は此の細胞の只一個より成る。アミーバ、バクテリアの如き、即ちそれである。然るに、是等の細胞が既に十分の食物を外界より吸收する時は、自然に分裂して

二新體となる。二新體は更に四となり、八となり、十六となりて増殖する。是より稍や進みたる生物となれば、分裂の方法に變化を來し、或は一個の母體より數個の娘體を出芽し、或は一母體より多數の胞子（種子の如き者）を分出するのであるが、兎にかく此時未だ何等の兩性現象を生じて居らぬ。故に之を無性生殖と云ふ。

　次に漸く接合といふ事が起る。是は母體より分出せられたる細胞が、二個接合して後、始めて新個體となるのである。此の接合の中にも、同形の細胞が接合するのもあれば、大小二種の細胞を生じて其の二種が接合するのもある。而して此の二種の中、小なる方は鞭毛を有して運動活潑となり、大なる方は多く營養分を貯へて球狀となり、小なる方は常に運動して大なる方を尋ね、大なる方は常に靜止して小なる方を待つ。茲に至れば此の接合は既に有性生殖である。即ち此の大なる生殖細胞を卵子と云ひ、小なる生殖細胞を精子と云ふ。精子は男性にして、卵子は女性である。兩性の



現象茲に始めて起る。

　扨、何故に斯くの如き兩性の現象は生じたか云ふに、二細胞が結合すれば、單獨の者よりも多大の活力を生ずるからであらう。夜光虫と稱する單細胞動物の如きは、一種特別の例外を成して、二個體一たび接合したる後、暫くにして又分離するのであるが、彼等は其の接合中に、各細胞の核の半分づゝを交換するのである。是に依りて見るも、二細胞が結合して其核を混一する事が、新生活に力を與へるものと考へられる。然るに、其の結合が最初は同形の者の間に行はれて居たのに、後漸く分業が起つて、一方は多く營養分を貯へる事の任に當り、一方は活潑に運動する事の任に當つた。それは矢張り、此の分業のある方が、生殖の目的を達する爲に便利なからであらう。斯くて生物に男女兩性の別を生じはじめたが、此の別は何處までも分業であつて、其の間に輕重尊卑のある筈は無い。

　分業は同時に又他方面にも起つた。單細胞動物は其の身體の全部より食物を吸收し、其の身體の全部を分

裂して生殖を爲したが、此の單細胞動物が多數結合して群體を爲すに至れば、其の各細胞間に漸く分業を生じて、或部分の細胞のみが食物を吸收し、或部分の細胞のみが生殖作用を爲す事になる。此の分業が次第に進んで、此の群體の結合が密接になれば、玆に又新しき一個體一動物を生ずる。即ち食物專門の細胞は消化器官となり、生殖專門の細胞は生殖器官となり、其他、追々に感覺器官を生じ、呼吸器官を生じ、運動器官を生じ、目を生じ、鼻を生じ、口を生じ、骨を生じ、肉を生じ、筋を生じ、手を生じ、足を生じ、斯くて次第に高等動物を生じて來た。

此の分業は、植物に於ても固より同樣で、目だの、鼻だの、手だの、足だのこそ無けれ、呼吸の爲に葉を生じ、食物の爲に根を生じ、生殖の爲に花を生じた。隱花植物の中にも、菌類の蕈の如き、杉菜の土筆の如き、羊齒類の實葉の如き、著しき生殖器官がある。

分業は生殖器に關し更に著しき進歩を呈した。植物に在つては、一株に多數の花を生じて、其の一花の中に兩性生殖器（雄蕊及び雌蕊）を具へて居るのもあるが、雄蕊のみを有する花と雌蕊のみを有する花とを別々に生ずるのもある。南瓜の仇花と稱するは即ち雄花である。又更に進んでは、花に依つて雌雄を別つのみならず、雌樹と雄樹とに別れたものもある。銀杏、柳の如きは即ちそれである。然るに、動物に至つては、此の分業が愈よ進んで、大抵の者は雌體と雄體とに別れて居る。雌雄同體の者は甚だ稀である。人の善く知る動物では、蚯蚓、田螺、蝸牛の類がそれである。處が是に就て頗る面白き現象がある。雌雄兩蕊を具へた花でも、雌雄同體の動物でも、其の一花中、或は一體中の兩生殖器は決して交接を爲さぬ。即ち彼等は決して自家受精を爲さぬ。彼等は必ず他の花、或は他の動物の異性生殖器と交接して、互に受精作用を爲す。殊に植物に在つては、其の花の構造に依つて（即ち雄蕊のみを長く花の外に出だしなどして）自家受精を避けて居るのもある。又自家雄蕊の花粉が誤つて雌蕊の柱頭に落つる時には、柱頭より毒液を分泌して花粉中の

精子を殺す者もある。但し或特別の場合、例へば近隣に絶えて同種の植物の無き時、或は同種の花が既に悉く凋落した時などには、却つて自家受精に依つて纔かに其の子孫を遺す事もある。されば、一花中、或は一體中の兩性生殖細胞の結合よりも、別花、或は別體のそれの結合が、一層有力有効であるので、漸次に雌雄別花、雌雄別樹、雌雄別體の分業に進化したものであらう。

斯くの如く、生殖作用に雌雄の分業が生ずると同時に、生物は最早や獨立して生存することが出來なくなつた。即ち此の雌雄兩生殖器の結合の爲に、同種類の他の個體と共同の働きをせねばならぬ事になつた。而して其の兩者結合の方法として、極めて微妙なる種々の現象が生じて居る。

先づ植物界を見るに、隱花植物に在つては、精子が水中を游泳して卵子の處に赴くのであるが、顯花植物に在つては、雄蕊の花粉が、水、風及び虫の媒介に依つて、他の雌蕊の柱頭に達し、茲に受精作用を遂げる



のである。而して其の媒介の方法に又種々面白き現象がある。

一例を擧ぐれば、石菖藻の花の如き、雌花が僅かに水面に出で、雌蕊の柱頭が花の外に突出して下向に垂れて居ると、雄花は本體より離れて水面に浮び、恰かも其の葯（雄蕊の一群）を捧げたるが如くにして流れ來り、茲に雌雄交接して受精を終る事になる。次に、杉、松、稻、麥の如きは、風に依りて媒介せらるゝが故に、其の花粉は極めて輕く且つ小さく、恰かも塵埃の如く空中に飛散する。此の方法は甚だ不確實の樣であるが、其代り無數の細粉を撒布するので、十分に其目的を達する事が出來る。殊に遠方に運搬せらるゝ爲には、却つて此の方が便利で、銀杏の如きは、雌樹と雄樹と十里も隔てゝ居ても、猶ほ好く實を結んで居る。次に高等植物の多數は、大抵、蝶や蜂の媒介に依る。蝶や蜂が一つの花に止まると、其の脚や羽に花粉を付けて、それを他の花の柱頭に運ぶのである。故に此類の花は、或は其色を美にし、或は其蜜を甘くし、或は其香を高

くし、種々にして成るべく多く蜂蝶を引寄せんことを勉めて居る。

次に動物界を見るに、動物は植物の如く媒介を要せずして自ら雌雄の交接を爲し、各その固有の生殖器に依りて體内に受精し、卵生或は胎生を爲すのである。然るに、植物の花が其の媒介物に應じて種々の變化を生じたと同じ樣に、動物の身體は雌雄淘汰の爲に多大の變化を生じた。

例へば、或種の雄は、雌を得んが爲に激烈なる鬪爭を爲したる結果、其の身體甚だ强大と爲り、或は鋭利なる武器を有するに至つた。或者は又、特に雌を捕獲するに便利なる器官を有して居る。或者は又、特に(平生、或は交尾期に限り)美色、美聲、美香を有して雌の心を攪るに勉めて居る。美しき羽色の鶉、美き聲の鶯、喧すしく鳴く蛙、麝香を有する鹿などが、即ちそれである。或鳥類の如きに至つては、雄が雌の前に立ちて其の美しき羽を擴げ、種々をかしげなる舞踏を爲して雌の歡心を求めて居ると云ふ。猶は其他に、特に



視官、嗅官等の著大なる發達に依りて、雌を得るの便利を有して居る者もある。

然るに、或種の者に於ては、此の分業が甚だ奇妙なる發達を爲して居る。例へば或輪虫類の如き、雌雄其の形を異にし、雌は雄の五倍の大さあり。又或蜘蛛類の如き、雌雄大小の差異餘りに甚だしく、雄は雌に附着して、恰も雌の身體の一部の如く見えて居る。

斯くて動物は、是非とも二個體が共同して生殖の働きをせねばならぬので、漸くにして社會(若しくば團體)の形を成しはじめた。平生は個々別々に生活して居る者でも、交尾期だけは群集するのが甚だ多い。蛙でも、蟬でも、蜻蛉でも、蚊でも、鰯でも、鮭でも、犬でも、猫でも、それである。

然し、動物の團體生活は必ずしも生殖の爲ばかりでは無い。最初、單細胞動物が群體を爲して、それが後に密接なる結合を作り、遂に新しき一個體の動物となつた如く、一個體の動物が又群體を爲して、其間に分業を作り、遂に獨立して分離する事の出來ぬ一團を生

じたのもある。管海月といふ群體の如きは、元來、海月が幾つも連續して出來た樣なものであるが、其の個體の間に分業が生じて、或個體は生殖を掌り、或個體は感覺を掌り、或個體は敵を拒ぐ事を掌り、或個體は食物を取る事を掌つて居る。そこで此の群體の全部は殆んど一個の動物體を成して居るのである。

然るに、斯くの如く個體と個體とが肉に依つて連續して居らずとも、矢張それと同じ樣に、著しき分業に依つて團體を作つて居る者もある。蜂、蟻などの社會が即ちそれである。先づ蜂や蟻の社會には、雌虫と雄虫と職虫との三種がある。職虫は其數甚だ多くして勞働を專門と爲し、生殖の事には一切關係せぬ。或種の蟻は、此の職虫が又二種に別れて、其形を異にし、其專門を異にして居る。雄虫は其數甚だ少く、少しも勞働に從事せぬ。雌虫は、蟻にあつては僅かに數疋、蜂に在つては只一疋である。故に蜂にあつては之を女王といふ。

管海月や、蜂や、蟻の如き、分業的社會生活は、他



の多くの動物では見るを得ぬ現象であるが、然し、寒氣を凌がんが爲に、敵の攻擊を拒がんが爲に、食物を求め、居處を作る便利の爲に、多數群生して居る動物は甚だ多い。又、鳥獸の一群中、或者が旅行の嚮導を爲し、或者が番兵の役を務むるなどは、人の善く知る話である。カモメの群、海狸の群、狼の群、オットセイの群などは、高等動物群生の例である。

然るに、茲に又、卵の保護、幼兒の育成の爲に、雌雄間に特別の關係が生じて來た。雌が卵や幼兒を產みばなしにして、それで育つて行く場合には、雌雄の關係は只だ交尾のみに止まるが、卵や幼兒の世話に多くの力を費さねばならぬ場合には、雌ばかりでは到底やりきれぬので、雄も之を助ける事になる。例へば、歐洲產の或蛙は、其の股間に多くの卵を附けて居るので無論それは雌であると思はれて居たのに、善く研究して見たれば、それは雌の產んだ卵を雄が保護して居るのであつた。又「たつのおとしご」と稱する動物は、雄の腹に囊が在つて、卵は其囊の中で孵化せられる。「か

じか」「とげうを」の類も亦た、雄が其の巣の中の卵及び幼兒を保護して居る。鳥類に至つては、雌雄協力して巣を作り雛を育てる者が甚だ多い。

斯くて此の關係が、幾度も連續し、若しくは繰返されたので、遂に雌雄間に永久的の關係を生じ、稀には鳩が十何年間、夫婦生活をしたといふ話もあり、鷹が一生涯、夫婦であつたといふ話もある。殊に高等の哺乳動物に至つては、育兒時代が甚だ長いので、從つて夫婦關係も次第に密接となり、猩々などの如き類人猿が、粗末ながら家屋をも作りて、夫婦親子同居して、殆んど人間の如き家族生活を爲して居る者も生じて來た。又、類人猿の或一種には、斯くの如き家族が多數集合して、人間の如き部落を成して居る者もある。

是より進んで人間社會の事を考へて見よう。

（第一章終）

△本篇は本號以下七八回に分載して、本年中に完結を告げる筈です。



# 多摩川の渚にて

佐々木喜子

◎記者様、私は第四卷第一號より清き趣味深き此の家庭雜誌の愛讀者となりました。殊に第三號の界記者樣の「僕の夢」を拜讀致して何となく嬉しく、私は偉大なる自然の美といふ慰籍ありと云ふことを知りました。

◎私の居ります所は、四時雪を戴いて居る富士は遙か西に見えます。前には清き多摩川の分水が絕えず流れて奇麗な石があります。後は蘚苔として杉や檜の森もあります。勇ましき汽笛の聲も響動します。そして土地もまづ裕かです。其の周圍は田畑で麥と菜の花で美しく飾られて居ります。其の他名も知れぬ赤や紫の愛らしい草花が一面に咲き亂れて其内スミレと云ふ花は誠によい香ひが致します。犬、鷄、牛も其處此處に步いて居ります。申すまでもなく新鮮の大氣は自由に呼吸して居ります。

◎太陽が西に沈まんとする時、西の空には灰色の雲が穩にたなびいて其の間から麗はしい光が射るが如くに洩れて、賤が家も山も田畑もさてはありとあらゆるものを金色に染あて、殊に多摩川の流れにパット照り返して居る樣、……靜かながら流はゴーッとやつてきてパサーリツーッと引いて、其の跡のまだ砂の中に染みこまない内に又後からドーと寄せて來る、恰も此の塵の社會を根本から洗ひ去つて、穢のない美しい社會にしやうと云ふ風で、絕えず砂石にあたる飛沫はキラ〳〵と輝く樣、……實に何ともいはれない宛然一個の大パノラマであります。

◎あたら理想にあくがれす。希望にかられす。虛榮崇拜の念又幸に生せす。金力の社會を外に階級の支配をうけす、唯だ雀の愛らしく自由々々と鳴く聲を軒端で聞くのです。そして夜は清き月が少さなバイブルの上に美しき笑顏を見せて下さるのです。

# 日米結婚の新家庭

△本誌の寄稿家にして、小生の友人なる金子喜一氏が、曩に紐育に於て米國婦人ジヨセフイン、コンガー氏と結婚せられた事は、幾度も本誌に記して置きましたが、先ごろ金子氏より幸德千代子氏に送られたる手紙は、此新夫婦の生活を想像するに足り、又世界主義、同胞主義の爲に甚だ善き教訓であるので、茲に借用して掲載する事としました。

△假し、英語が世界語になるであらうとの斷定に就ては、小生は如何かと思ひます。エスペラントが果して其儘行はれるか否かは、小生も容易に信じませぬけれど、英語で以て世界を統一しようと云ふのは、今の政治上の帝國主義と似た所があるかと思ひます。然し人類の言語を統一せねばならぬといふ理想に於ては、固より金子君と小生と全く同樣であります。(堺生記)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

◎吾等お互に人種は異なり居候へども、精神と主義とに於ては全く相一致し、少しも隔つことなく、貧乏ながらの幸福の生涯を送り居候、只少しく變れるは、ホームにて自國語を語ることなく、英語のみを語られねばならぬことだけは、日本人には可笑しく聞ゆべく候へども、これも私平生の理想の一端に候へば、自分に於ては却つて嬉しく每日それを樂み居候

◎要は昨に日本語を學びてみたしなぞと申し出候も、私は決して敎へ申さず、私は世界の總ての住民が成るべく少數の言語を語り、遂には一言語を以て足るの時期の到來せんことを欲する者、而して英語は少くとも今日に於て殆んど世界一般に通ずるの言語なれば、なるべく此言語を用ゆる人の多くなることを希望いたし居候、勿論近來人の語るエスペラント(世界語)の如きもあるとも、私は餘り彼の語に望みを措き申さず、却りて將來英語は世界の普通語たるを信じ――勿論多少の變化改良を加へねばならぬ點これあり候も、それは適者生存の理にて改めらるべくと存じ候へば、日本人の如きも、殊に婦人の如きは、自ら英語を實習して、其家庭に於て將來の國民たる子弟に其準備をなされんことを勸め度候、言語の統一は世界を根本的に平和に導く所以にして、又世界同胞主義の實現せらるゝ日と考へられ候

◎私共の生活は頗るシムプル(簡易)にて、家にては食事をなさず、料理屋にて食ひ、唯だ一の客間兼書齋と一の寢室と一の浴室との三間が私共のホームにて之あり候、客間にはピヤノあり



書籍あり、タイプライターあり、以て讀むべく以て音樂を樂むべく、以て文章をかくことを得べく候、かゝる便利なる家に住みつけては、日本の如き寒くして不便なる家には迚も住はれまじくと推され居候

金子喜一

幸德千代子樣

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

△金子君は近々有樂社より How I married an American girl(予は如何にして米國婦人と結婚せし乎)と題する小册子を發行する由なるが、此書は氏が結婚以前にコンガー孃に送りたる英文の手紙を集めたるもので、定めて趣味多き事と今より發行の期が待たれます。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

Socialism is the hope of al- of the rich no less than the poor.

The poor are in chains of iron, the rich are in chains of gold; but their chainsare linked together.

Once the chains of the poor are broken, the rich shall also be made free. — *Bruce Glasier.*

(五十頁に此英文の反譯あり)

# 「聖書と婦人の權利」に就いて

山口孤劍君に與ふ

中尾傘瀬

足下が或は「火鞭」に於いて、或は「光」に於いて、常に屢々帝國主義、國家魂の鼓吹者たる海老名彈正氏を攻撃し、現代の基督教徒を呪咀しつゝあるは、余が認めて少快とせざる所にもあらず。されど、それが爲に基督の基督教をまで、一概に排し去らむとするは、余が甚だ慊らざる所となす。殊に本誌前號の「聖書と婦人の權利」と題する一文の如き、全く見當違ひの仇矢を暗雲に放てるものにして、余は窃かに足下の爲に惜しまずんばあらざる也。足下は舊約聖書を以ツて基督教唯一の經典となせるが如し。是れ抑々第一の謬見なり。足下が單に「聖書」として採用する所の舊約聖書は、言ふまでもなく、基督教以前の道德を載せたるものにして、猶太教の經典に外ならず。足下の知る如く、猶太教は基督教にあらず。よし基督教は猶太教に負ふ所多々ありと雖も——又キリストの言にも「我は律法と預言者とを廢つるが爲に來たれるにあらず。却つて之を成就せむが爲に來たれり」とありと雖も、其道德の精神、宗教の思想は、悉く一なりといふべからず。寧ろ大に變遷進化せりと見るを妥當とすべし。例へば舊約時代に於いては「目にて目を償ひ、齒にて齒を償へ」といへる報復主義なりしかども、新約時代に入りては「右の頬を批たれなば、左の頬をも受けよ」との無抵抗主義となりしにあらずや。舊約にては、神は正義の神、萬軍の主、嫉妬の神、おそろしき神にてありしかども、新約にては愛の神、憐愍の神、恵の神、アバ神よと呼び得べき神となりしにあらずや。

なるほど足下の說の如く、聖書も時代の産物なるに相違なけれども、舊約と新約との間には劃く大相違あり、大懸隔あり。足下が「婦人の權利」云々を證するに、徹頭徹尾舊約の例を援き來たッて、一も新約のそれを擧げ來たらざるは、何たる手ぬかりぞや。舊約は基督教發達の歷史に過ぎざるにあらずや。「婦人の權利」を認めざりとて、又足下の所謂「婦人の事業」を載せざりとて、毫も基督教の恥づる所にはあらざる也。

又足下はキリストの「凡そ女を見て色情を起こす者は裏心既に淫せるなり」といへりしに據りて、キリストは婦人を以ツて觸るべからざる毒鬼惡冤の類と做したりといふと雖も、こは足下の曲解なり。キリストは婦人を見るは惡し、觸るは惡しゝと云ひしにあらず。情を起こすは即ち罪惡なりと、姦淫の根本動機を戒めしのみ。(之に就いては、余別に說あれども、今言はず。)

足下はパウロの「婚姻せざる者にありては、如何にして主を悅ばしむべきかと思ひ煩ふ」といふ語を取ツて、これ獨身奬勵說を産みしものにあらずやといふと雖も、こも亦足下の誤解なり。然り、カトリック教の僧尼と共に誤解なり。こゝは全文を讀み通さゞれば叶はず。全文(コリント前書の七)は「これ汝曹が思ひ煩はざらむことを願ふ。婚姻せざる者は如何にして主を悅ばせむと主の事を思ひ煩ひ、婚姻せし者は如何にして妻を悅ばせむと世の事を思ひ煩ふ」とありて、キリストの所謂「汝曹思ひ煩ふ勿れ」の語に、おのづから照應せるもの也。されば同書の中にも「婚するも可し」「娶るも罪を犯すにあらず。」唯傳道者が斯かることに心遣ひならむことを勸むと、パウロ云へる也。それのみならず、彼は「夫若し死なば心の儘に婚するを許さる」とさへ云へるに於いて、彼の精神を酌むに餘あるにあらずや。

更に足下にパウロが「夫ば妻の主にして妻を司るもの也」てふ語を援きて、夫を天とし妻を地とする東洋思想と異なるなしと貴めたりと雖

も、其全文「妻は自ら其身を主ることを得ず、夫之を主る。此の如く夫も自ら其身を主ることを得ず、妻之を主る」とあるを中捨てたるは如何にや。殊に「主に在りては男は女に由らざることなく、女は男に由らざることなし。女の男より出でたる如く、男は女に由りて出づ。而して萬物皆神より出づる也」と、主を怖れ、男女平等を說ける條を落としたるは如何。聖書を見るならば、全文を見られたし。初より何か缺陷瑕疵を發見せでは措かじとやうに、自巳の都合にて聖句を寸斷々々に切られては甚だ迷惑なり。聖書は部分的に見るべからず。全文を見て全體を貫流する思想を求められたし。

然も足下よ。こゝに注意すべき一事あり。パウロの言はパウロの言なり。たとひ彼自身「われ主の矜恤を蒙りて忠義なる者となりたれば」と、キリストの腹の裡を足駄穿きにて歩くやうなことをいへれど、彼の哲學はやはり彼の哲學なり。彼の宗教はやはり彼の宗教なり。固より多少キリストのいふ所と異なるものあるを豫知し置かざるべからず。之を豫知し置かざれば、基督の基督教は悟り難し。

又足下は英國基督教會の祈禱書を援かれたれど、こも亦カトリックの僧尼の解釋と等しく、誤謬なるを免れず。總じてカトリック、英國教會派は舊約的なりと知りたまへ。

基督教は基督に出で、パウロ其他使徒により少なからず潤飾せられ、中世期種々なる弊害を釀し、ルウテル前後大に改革せられ、再び基督の眞精神は發揮せられたりと雖も、今日尚基督の基督教ならざるもの頗る多し。足下、靜かに基督教を研究せらるゝならば、基督教の發達變遷、殊に猶太教と基督教との干係を、最もよく玩味せらるべき也。

なほ一言、足下の論法に小さき矛盾のあるを指摘せむ。足下は婦人が其要所働きを蹂みて、教會詣でするを笑ひながら、「女子の天職は只衣を縫ふことのみなりと云ふ乎」と咎められたるは、他により適當なる女子の事業あらむとの足下の意ならむも、余の如き、婦人が（男子も共に）教會に出入するは正當にして爲すべきことなりと信ずる者の頭には、足下の此言や洵に解するに苦しむ所なり。

其他足下の批難は悉く舊約的に繫れり。猶太教に繫れり。換言すれば、足下は過去の歷史を是非せしのみ。足下よ。基督教は過去の歷史にあらず。常に現在の事實なり。足下の言ふ所の如きは、基督教の與かり知る所にあらず。抑々基督教は日進月步して止まざる宗教なり。過去の歷史に大惡人ありとて、又現在に某々の小人



ありとて、將又將來に多少の罪人を出ださむとて、そは必ずしも耻づる所にあらず。基督教は絶えず、より善くなり行きて、遂に完美の域に達せむのみ。

最後に、本誌は宗教專門の雜誌にあらざれば、余は努めて簡略にしたがひたることを云ふ。

既に記しをへて、偶々舊約雅歌のシュラミのソロモンに對する語をおもひ出でたれば、こゝに添へむ。

「我はわが愛する者に屬し、わが愛する者は我に屬す。」

之を猶太教徒はエホバとイスラエル民との干係と說き、基督教徒は基督と人類との干係と說くと雖も、又一面に於いて、男女の愛を解きたるものと見るは、兩者共に一なり。

△社會主義は貧者と富者とに係はらず皆人の希望する所なり。貧者は鐵の鎖に繫がれ、富者は黄金の鎖に繫がる。而して兩者の鎖は相連れり。故に貧者の鎖が切棄てらるれば富者も亦た自由となる譯なり。

ブルース、グラシアー

# ●新刊紹介

▲破戒(小說)(島崎藤村著)　近來の名著です。新平民の小學敎員を主人公にして、新平民と稱せらるゝ階級が如何に世の輕蔑を受け、侮辱を受けて居るかを畫いた小說です。人種的偏見は實に人情の敵で、我々は極力之と戰はねばなりません。日本人が歐米人に輕んぜられるのも人種的偏見に依るのです。日本人が若しそれを憤るならば、先づ自己の同じ偏見を棄てねばなりません。即ち支那人、朝鮮人に對する輕侮心を去られねばなりません。況んや國内に於ける新平民族に對する輕侮心の如きは、實に謂れなき侮であります。それで我々は諸君が此小說「破戒」を讀んで、人種的偏見を去るの一助とせられんことを希望するのであります。然し此小說は決して議論ではありません。信州を舞臺にして、善く其風俗を寫し、人情を寫し、現在の生活を寫して居る。(價七十錢、上田屋發行)

▲自助論(上)(スマイルス原著)　スマイルス氏の「セルフ、ヘルプ」と中村正直氏が之を譯した「西國立志篇」とは、當時の靑年に著しき感化を與へたものであるが、近年に至つては只其名ばかりが傳へられて其實物は餘り多く讀まれて居らぬ。處が此頃又自然の氣運が回つて來たものと見えてスマイルス氏の著書の新譯が續出する事になつた。此書も亦其一である。俗惡無道なる成功熱(即ち金まうけ慾)が炎々として燃えあがつて居る今日、「自助」を勸め「立志」を說きたる此書が再現したのは、一面より見れば、稍や彼の俗惡無道を矯正するに足るとも思はれるが、又他の一面より見れば、スマイルス翁の裏書に依り其保護の下に彼の俗惡無道を遂行せしむるものだとも思はれる。兎にかく我々は此書を以て既に過去の物と見做す。今日と雖も少數の少年の此書に依つて感奮する者は必ずあるであらう。然し多數の貧しき少年より之を見れば、こんな「自助」や「立志」は昔の夢で、此の競爭の激しい、富の壓力の强い、資本家制度の下では、到底貧困少年の頭の上りつこは無いのである。されば此書の說く所も亦た今日に於ては富籤を買ふと同じ樣な結果になるのである。(價四十錢内外出版協會)

▲婦人の重寶(西谷龍顯編)　「家事の重寶」「臺所の重寶」「育兒の注意」「醫療の重寶」「衣服の重寶」「化粧の重寶」等の諸章に分たれて、一々細かき注意が書き並べてある。成程「重寶」な本だらうと思ふ。然し序文に「女子のつとめは、未婚の時と、嫁したる後とをとはず、おしなべて細かく手近き事のみなるが多く、女子の本分としてもまづ此外には出でぬものと知るべし」とあるのはチト閉口いたす(五十錢、實業の日本社)

▲簡易生活(布施知足譯)　佛人ワグチル氏の著 Simple Life を譯したるもの「簡易の思想」「簡易の言語」「簡易の義務」「簡易の日用品」「簡易の娛樂」「簡素美」「高慢と簡易」などいふ目次を見れば、内容もほゞ想像せらる、謂はゆる穩健の思想で、讀みて多少の利益あり、但し譯文が餘り達者すぎて、面白い代りに少々輕薄に感ぜらるゝ處がある。(價三十錢、神田表神保町東西社)

▲男女學生氣質　櫻井義肇氏が曾て現代學生の長所と短所とに關して、諸名士の意見を徵し、これをその主管する「新公論」誌上に掲げたるを、更にまとめて一册と爲したるもの、學生の爲には心得になること多し、殊に四十餘の名家の意見を此小幅の中に收めた所に、多種多樣の趣きが溢れて居る。(價廿錢、小石川原町鷄聲堂)

▲火鞭(第二卷第二號)　本號は全紙を擧げてトルストイ號と爲し「文學者としてのトルストイ」「杜翁の道德對宗敎の關係」「小說別れ霜」「何故に禍は存する乎」「トルストイの聖書句解」「鐵道工夫」等の文字が滿載せられて居る。トルストイの思想と文章とを一目の下に看んと欲する者は此號に於て多大の滿足を感ずるであらう(價十錢、神田三崎町三ノ一平民舍)

## ●由分社より

▲「婦人新論」に就ては色々考へて見ましたが迚も急に脱稿しそうに思はれませぬので、遂に本號以下の「家庭雜誌」に分載する事に致しました。惡しからず御諒察を乞ふ。斯くて掲載濟の上、多分今年秋の末には一冊にまとめて發行する事が出來るだらうと思ひます。

▲深尾韶君　は矢張り牛込區市ヶ谷なる東京監獄に居ります。豫審は既に決定して、兇徒聚衆の被告として重罪公判に附せられました。あまり罪名が仰々しいので驚いて居りますが、結局無罪の判決がある事と思ひます。深尾君よりの來書の一節に曰く「時は漸く春深うして上野あたり花まさに盛りなるべき今日此頃、とらはれ人の思出は、まこと斷腸に値するもの多かるべきを、さはなくて、只心やすく天を樂み得るもの實に外に在す方々の賜物ぞと、……かくて御書を讀みもて行く中に、彼の電車問題につきて市民の勝利を得たりてふ報は、いかに我を樂ましめたるよ！、あゝ正義！われたとひ罪なうして配處の月を見るも、部下百萬の人々に少しなりとも幸福を寄與せしことを思へば、心に何の不滿もなく、何の怒る所もなし。われは今唯、公平なる裁判を待ちて尙ほ天の命を樂むべく修養を積まんとのみ希ふ」「外よりの音づれほど私共の慰に藥は御座いません、今日は雨、さぞ櫻の色があせるだらうなど、今朝から監房の中で想像しては、御手紙を繰返し卷返し、殊に背山邊に摘草に入らしつたお知らせなどは、さこそと其あたりの景色を偲ぶのであります」

▲家庭雜誌廣告のチラシ　も拵へて見ました。社中の者が外出の折に配るのであります。若し讀者諸君の中に、此配布を助けてやらうと思召さるゝ御方あらば、チヨト葉書にて御申越し下さい。直ちにチラシを送ります。新聞紙に大きな廣告をして、景氣よく盛んに賣廣めるのは、資本の澤山ある商人の仕事で、迚も我々には出來ません。そこで我々は我々に似合うた、ジミな、小さな、一寸づゝ歩んで行く樣な方法を以て、賣廣めるより外ありません。處が、まじめに、正直に、根氣よくやつて居ると、その小さな方法に存外効果があるのです。チラシの配布も中々味のあるものです。

▲小冊子發行　此度「社會主義問答」といふ一錢本と「社會主義の詩」といふ五錢本とを發行しました。御志しある方は配布用として多數に御買取下さい。委細は別項の廣告にて御承知を乞ふ

▲前金切　になつた諸君は、御面倒でも成るべく早く次の前金御拂込を願ひます。封じ紙に朱印が押してありますから。



## ●本誌の寄書家（一）

△是までチョイ〱紹介した事もあるけれど、新しい讀者諸君もある事だから、改めて茲に本誌の寄書家諸君を紹介する。書く人と讀む人とは互に相親しんで居なくては面白くない。

△西村恵次郎君（渚山）　は改めて云ふ迄もない過去二年半の間、本誌の編輯全部を擔任した人、本業としては博文館編輯局に務めて居られる。

△久田賢輝君（二葉）　は農學に關する智識と農事に關する經驗とを有する人で、本誌の爲には主として園藝の事を書かれたが、本號の記事の如き文字に於ても、亦た其の忠厚の情と公正の判斷とを示して居る。ツイ先頃より讀賣新聞の園藝欄の受持になられた。

△中尾清太郎君（奎湖）　は岡山縣高梁高等女學校の教諭で、深く英語に通じ、又善く日本歷史を研究して居られる。其文、其學、共に記者の推服する所である。

△大石祿亭君　は紀州新宮の醫士で、熱心なる社會主義者である。久しく米國に滯在して居られたので、西洋料理には殊に大通である。料理に關する氏の記事には特別の價値あるものと御承知を乞ふ。又本號に見ゆるが如き、大膽奇警の思想と暢達の文字とも亦た氏の特色である。

△安藤兎毛吉君　は外國語學校の職員で「曲川」「火州」等の變名の下に、是まで本誌の爲に、種々なる方面に筆を執られた。其の趣味は最も廣く、其の思想は最も新しい。

## ●チラシ配り

やす子

△家庭雜誌のチラシ配りを思ひ付きまして、先月の第二土曜から翌日の日曜へかけて少しばかり試みました、女一人で男のすなる引札まきは何んとなく心細いやうな氣がするので、二人の友達に助けて貰ひ、土曜日の午後、九段から日比谷公園へ出掛けました、

△數限りない通行人へ一々配るのなら造作もありませんが、成るべく家庭を持つて居るらしい婦人の方にあげやうと云ふ初めの約束ですから三人とも目と心とに油斷がありまん、併し馴れぬ事ですから隨分極まり惡るく、最初は三人一團となつたまゝ兎角尻込み勝ちで別れ〳〵になつて配る事が出來ませんでした、がこんな事ではと氣を取り直して別々になつて配りました、けれども此日は人出が少なかつたので思ふやうに行なかつたのみならず、冷笑、嘲罵、愚弄、あらゆる鐵を八方から射かけられました、殊にそれが多くは若い婦人方からなのですから驚きました、或る男達に「成程此は好い思ひ付だ、女の廣告屋とは新案だ」と笑はれた時は、然て覺悟の身にもヒヤリとして、不快の感を禁じ得ませんでした、此日は五百枚配りました、

△日曜日には更に勇氣を起して朝から上野公園へ出掛けて配りました、櫻は咲いて居る、日和はよし、非常の人出の中を、私共三人は櫃現樣の前の處を三方に別れて配るのです、僅かの間に千五百枚配りましたが、女の方にあげるのには實に骨が折れました、「お邪魔でも何卒……」と挨拶しながら差出すチラシを、男ならば直ぐ禮を言つて受取るとか、默つて受取るとかしてくれますが、御婦人になると容易に手を出して下さいません、唯呆れたと云ふ樣な風をして、ジロ〳〵私共の顏をお見詰めなさるのです、間の惡るい事といつたらありません、世間の波風を知らず深窓の中にタレ籠めてお出でなさる御婦人方は、偶々お花見に出て、私共が職業の爲めに戰つて居る有樣を何と見てお居ででしよう又何と思つて下さるでしよう、中には丁寧に禮を仰やつて「有難う」「御苦勞樣です」などゝ言つて下さる方もありますが、其時の嬉しさは天へも昇るやうで、涙がこほれるほど其人が床しくて堪りません、此刹那がチラシ配りの最も得意な時なのです、

△最後に、夫は新調の洋服、奥樣はお定まりの廂髮、五分も透かぬといふ若い當世の御夫婦達に一枚あげました、するとお二人で暫らく見ていらしつたが、やがて大聲で笑つて、其チラシを其處へ投げ棄てたまゝ、振り向きもなさりません、マア何といふ呆れた仕方でしよ、私は暫らく其後影を見送りました、如何なる心があれば斯うした同情の無い仕打が出來るだろうと思ひました、

△御夫婦達の方、殊に御婦人は一入同情のあるものと思ひ込んでのチラシ配りが此始末ですから、私共は家を出た時の勇氣も挫けてしまひした、決して禮を云ふて下さいではないが、此方からは「お邪魔で御座いましようが」と挨拶して差出すのですから、假令手を出すのが面倒と思つても、少しは思ひやりをして心よく受取つて下さつてもと、ツイ愚痴も出るのです、

## ●本誌の寄書家（一）

△白柳武司君（秀湖）は早稲田大學の學生で、又熱心なる社會主義者である。專門は哲學であるが、文學の方面に於ても亦た甚だ有望なる秀才である。「目黒の里人」といふのは君の覆面した所であつたのを、ツイ過つて前號の表紙の目錄に、「ハイカラ女學生」の題下に秀湖の名を記したので、覆面が剝がれてしまつた。

△竹内余所次郎君は藥劑師で、日本社會黨評議員の一人である。此度平民館を起して貸貸調判所を創めた事は別項記載の通りである。

△上司延貴君（小劍）は讀賣新聞の記者で、「其日〳〵」の銳利痛快なる短文で大いに世の注意を引いた人である。

△中野熊太郎君（啞蟬）は記者の舊友で、福岡日々新聞の敏腕の記者である。此頃上京して居られるので、遂に記者の廚となつて、次號から地方婦人會の實況を諷刺的に書いて下さる筈です。猶は是を緣として今後も絶えず寄書せらるゝ筈です。

△幸徳傳次郎君（秋水）有名なる社會主義者、今米國桑港に在り。今度の大地震で怪我は無かつたかと、我々友人は深く氣遣つて居るのです。

△坂口二郎君（月の輪）早稲田大學出の秀才の一人で、小劍君と同しく讀賣新聞の記者です。今後屢々寄書せらるゝ筈です。

△金子喜一君　は米國紐育に在る社會主義者です。別項「日米結婚の新家庭」御參照を乞ふ。

# ROMAJI-HIROME-KWAI.

## KISOKU.

1. **Namae:**
   Rōmaji-Hiromĕ-Kwai.
2. **Jimusho:**
   Tōkyō, Hongō, Higashi Katamachi 111.
3. **Mokuteki:**
   Nihon-go wo Rōmaji de kaku koto wo hiromeru.
4. **Shigoto:**
   a. Zasshi wo dasu.
   b. Shomots wo shuppan suru.
   c. Yoriai wo suru.
   d. Enzets-kwai wo hiraku.
5. **Kwaiin:**
   Kwai no shugi wo sansei shi, tsutomete koreo jikkō suru hito. Kwai no iji no tame ni maigetsu 50 sen ijō kifu suru kwaiin wo Iji-kwaiin to nazukuru. Kore ni wa hoka no iji-kwain no shōkai wo yō suru. Sono hoka no kwaiin wa betsu ni kwaihi wo dasu ni oyobanu.
6. **Mōshikomi:**
   Kwaiin ni nari-tai hito wa zasshi "Rōmaji" ni tsukete aru mōshikomi-gaki ni rōmaji de kaki-ire wo shite Jimusho ni todokereba yoi.

Zasshi "Rômaji" wa maigets 1 kwai, 15 nichi hakkô, Atai 1 bu 7 sen, 1 nen bun yûzei tomo 80 sen. Hakkôjo wa Tokyô, Hangô, Higashikatamachi, 111.

---

# Tōsho o Tsunoru.

Rômaji nite omoshiroki Tôsho o oyokoshi kudasai. Tadashi amari nagai Mono wa komarimasu.

(*Katei-Zasshi Kisha.*)

# 羅馬字綴方に就て

「時代思潮」より轉載、其一節

安藤兎毛寄

◎人代名詞を至極簡單なる形に改めた、即ち一人稱を總てWとし二人稱をNとし三人稱をKとした、Wは(わたくし)又は(われ)に取り、Nは(汝)又は(なれ)に取り、Kは(彼れ)に取つたのだが、何故かく簡單にしてしまつたかと云ふに、一體我邦の人代名詞は餘りに階級儀式的で、つまらなく復雜を極めて居るので、全く之を打破して一樣平等の形にしたいと思つたのである

◎相手を見て(あなた)と云ひ(きみ)と云ひ(きさま)と云ひ(おまへ)と云ひ、そして自分もそれに相應して(私)と云ひ(僕)と云ひ(此方)と云ひ(やつがれ)と云つて面倒なる使ひ別けをして居るが、よく考へて見ると斯るのん氣な無意味な事は最早廿世紀の多忙な日本人には實際出來なくなつた

◎そこで若し幸ひにして此羅馬字の使用と共に諸君が此趣意を賛成せられて人代名詞の大改革を實行せらるゝならば、予は羅馬字使用のそれよりも或意味に於て一層喜はしく思ふのである

# RÔMAJI RAN



## Sakura.

*Tam.-Tak.*

Konogoro wa Sakura no Sakari de, Uweno, Mukôzima, Koganei nado e Hitode ga sazo ôi kotode arô. Sore ni tuite, Doitu ni otta tokino Hanami wo omoidasu.

Hanami nado no hûriuna, syareta Koto wa Nipponzin dake de, Gwaikokuzin niwa nai yô ni kiite otta ga, kitto sô tomo kagiranai. Doitu de watasi no otta Göttingen no Kinzyo ni Witzenhausen to iu Tokoro ga aru. Sono Kinpen de, Werra to iu Kawa no Huti wa hiroku hiraita Taniai de aru ga, sono Ryōgawa ni Sakura ga takusan atte, Sakura no Meisyo de aru. Soko e Doituzin ga ôzei, Kosi-, iya Sage-bentô de, Hanami ni iku.

Sikasi Hana wa Nippon no to tigatte, massiro de, totemo, Koganei nado no yôni rippa dewa nai. Mottomo, sore wo Enpô kara mita tokoro ga, Sirokumo no yôda to iu no niwa, kaette yoku atatte oru. Mata mukôno Sakura wa kotirano to Syurui ga tigatte, Mi wo toru no de, Hana wa Tuketari de aru. Sakura no Mi wa nama demo kui, mata Satôduke ni site simatte oite nitizyôno Syokuzi nimo oku tukau.

Kono Tokoro ni, *Kolonialschule*, to iu hitotuno Gakkô ga atte, soko ni tiisai Nipponno Sakura,—sakurairono hontôno Sakura–ga ippon atta. Kore wo mita tokino Uresisa wa nakatta. Watasi wa Uta nado yonda koto ga tonto nai ga, kono Toki dake wa, issyu yonde, atora ni otta Tomodati ni okutta, sikasi sono Monku wa oboete inai. (*Tamaru Takurô Shi no Bunshô. "Rômaji" yori*)

## Haru no Uta.

Harusame ni Kamogawa zutsumi
kure some te Janome-Kogasa no
Hito utsukushiki.

(*Shioda Kōyen.*)

Onna-de ni Mochi tsuku Oto no
hikukushite, Urano Hatake ni
Momo no hana saku.

(*Komaki Sarei.*)

Hana no Modo kure to oboro ni
Tsuki-hime wa, Ruri no Utena
ni mai ide ni keri.

*Yemura-Sei.*

Murasaki ni Ki ni Kurenai ni Ai no
Kumo, Nishi ni nagare te Hana
chiri midaru.

(*Shinoya Hōkei.*)

Hōjō ni Go wo uts Hito no Koye
taete, Mahiru shizuka ni Ume no
Hana chiru.

(*Tanaka Kwarui.*)

Kane no Ne ni Hana-gumo yurete
futari tatsu, Oka utsukushiku tasogare ni keri.

(*Hase Hakumin.*)

## Chiyo-chan.

Chiyo-chan anatawa oikutsuka,
Kotoshi yattsuni nattanoyo;
Jūnen tatsuto oyomedane.
Ara! māiyana ojisanda,
Atashi oyomenya ikanaiwa;
Ha ha ha ha ha,
Ho ho ho ho ho,
Mata oide!
Sayō nara!

(*Shinsen.*)

# 家庭雑誌第四巻目次


## 第一號（一月一日）

△理想の影（詩）△我望の家庭主義（堺利彦）△眞心のお年玉（安楽生）△婆アの皮（深尾韶）△臺所廢止論（中尾叙瀬）△動物虐待税（緑亭生）△化言葉（久田二葉）△日本服の將來（韶）△炬燵雑談（堺の上の柿、エスペラント語、男子中心の態度）（彦）△老父母を迎ふるの記（西村渚山）△北海道の冬の生活（韶）△ローマ字欄等

## 第二號（二月一日）

△死にゆく母に代りて（詩）△醜惡なる家庭（深尾韶）△謎の指環（西村渚山）△滑稽の研究（中尾余瀬）△火の中に住むの記（竹内余所次郎）△春の料理（石井泰次郎）△婦人と閨袋（久田二葉）△火州庵小信（まがりかね生）△良妻賢母主義（堺利彦）△炬燵雑談（旅行の利益、宿屋と我家、能楽見物、狂言「釣針」、家庭の厚氷、嫁さんの盗み食、女天才の束縛、柔順の美德？、傍若無人の言、革命的戀愛）（彦）△雪姫物語（上）（白柳秀湖）△婦人新論の序（彦）△ローマ字欄等

## 第三號（三月一日）

△僕の夢（彦）△婦人と經濟的平等（堺利彦）△春雨日記（ふかを生）△反抗の聲を擧げよ（深尾韶）△女子の威嚴に就いて（中尾余瀬）△家庭時言（久田二葉）△病器料理（大石禄亭）△炬燵雑談（異人種結婚、金子コンガー夫人、波蘭の珍客、慈善は偽善なり等）（彦）△思ひも寄らぬ便り（安藤曲川）△初春の草花（二葉）△雪姫物語（中）（白柳秀湖）△讀者より△新刊紹介△春の料理△ローマ字欄△由分社より

## 第四號（四月一日）

△生涯幾度の花（利彦）△貞女道を批評す（中尾清太郎）△鳩と社會主義者（堺利彦）△聖書と婦人の權利（山口孤劍）△伴り郊行の記（堺利彦）△余は寧ろハイカラ女學生を取る 目黒の里人）△我等の胃袋（上司小劍）△天つ女神の歌（秋水女史）△日本服論（竹内余所次郎）△新案料理數品（大石禄亭）△西洋の野遊び△燐餅の拵方△雪姫物語（下）（白柳秀湖）△人不知（小説）（利彦）△史に家庭雑誌を讀ませる法△貧と愛情（西村渚山）△四月の馬鹿遊び△羅馬字欄△新刊紹介







| 本誌代價 | |
|---|---|
| 一部 | 金十錢 |
| 六ヶ月前金 | 五十五錢 |
| 一ヶ年前金 | 壹圓 |
| （何れも郵税共） | |

| 廣告料 | |
|---|---|
| 特別一頁 | 十圓 |
| 普通一頁 | 七圓 |

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。
▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治三十九年四月廿八日印刷
明治三十九年五月一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人　堺　利彦

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中村彌助

發行所　東京市麹町區元園町一丁目廿七番地　[illegible]

大賣捌所　東上 [illegible]

五冊前金七十錢 〇 十冊前金一圓三十錢（郵稅共）

明治卅九年 五月十五日發行 價十五錢

堺利彥編輯

# 社會主義研究

## 第三號

# THE STUDY OF SOCIALISM

MAY 15, 1906.—No. 3.


▲第一號（三月十五日）

共產黨宣言 マルクス、エンゲルス 幸德秋水、堺利彥合譯

マルクス傳 リープクネヒト 志津野又郎譯

エンゲルス傳 カウツキー 堺利彥譯

萬國社會黨大會略史 大杉榮

失業者問題應急策 志津野又郎

▲第二號（四月十五日）

無政府主義の哲學 クロポトキン 白柳秀湖譯

無政府主義の二派 久津見蕨村

無政府主義と社會主義 堺利彥譯

社會主義史大綱 堺利彥譯

小說 木芽立（炭坑勞働者の生活） ゾラ作 堺利彥譯

▲第三號（五月十五日）

初期の社會主義者 カーカップ 白柳秀湖譯
フーリエー、サンシモン、ルイブラン、プルードン、ロバートオーエン

ラサール及其學說 カーカップ 志津野又郎譯

マルクスの學說 カーカップ 堺利彥譯

小說 木芽立（二） ゾラ作 堺利彥譯


* * *

"In every historical epoch, the prevailing mode of economic production and exchange, and the social organisation necessarily following from it, form the basis upon which is built up, and from which alone can be explained, the political and intellectual history of that epoch."

— KARL MARX.

* * *



發賣所 東京市麴町區元園町一丁目二十七番地 由分社

# 由分社發行書籍目錄

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

社會主義神髓　幸德秋水著　價二十錢
社會民主黨建設者 ラサール　幸德秋水著　價十五錢
革命婦人　平民社同人編　價十二錢
百年後の新社會　堺利彦抄譯　價五錢
理想鄉　堺利彦抄譯　價五錢
通俗社會主義　堺利彦譯述　價二錢
少年叢書 目のある人　堺利彦著　價十錢
社會主義問答　堺利彦著　價一錢
社會主義の詩　由分社編　價五錢
社會主義の話（發賣禁止）　深尾韶著　價一錢
月刊 社會主義研究　堺利彦編輯　價十五錢
家庭雜誌合本（第二卷）價五十錢（第三卷）價八十錢

發行所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社

# 由分社取次販賣書籍目錄

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

社會主義入門　平民社同人編　價十錢
經濟進化論　田添鐵二著　價十五錢
富の壓制　西川光二郎著　價十錢
土地國有論　西川光二郎著　價十錢
消費組合の話　石川三四郎著　價十二錢
地上の理想國 瑞西　安部磯雄著　價十五錢
英國勞働界の偉人 バアンス　西川光二郎著　價五錢
普通撰擧の話　西川光二郎著　價一錢
廿世紀の怪物 帝國主義　幸德秋水著　價廿五錢
小説 火の柱　木下尚江著　價卅五錢
小説 良人の自白 上中下全三册　木下尚江著　價壹圓
小説 勞働問題　堺利彦譯　價卅五錢
家庭の新風味　堺利彦著　價壹圓

取次所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社

家庭夜話　堺利彦編　價壹圓
枯川隨筆　堺利彦著　價二十錢
言文一致 普通文　堺利彦著　價廿五錢
我家の犬猫　堺利彦著　價八錢
小品文集 半生の墓　堺利彦著　價卅五錢
小品千鄙 智識と趣味　斯波貞吉編　價卅五錢
少年少女 新遊戲集　西村渚山著　價廿五錢
社會主義名士肖像 畫葉書　一組六枚　價十錢
詩集 わか草　樋口配天著　價三十錢
社會主義概評　島田三郎著　價三十錢
社會黨　西川光二郎著　價二十錢
トルストイ翁 日露戰爭論　平民社譯　價八錢

社會主義中央機關 **光**　每月二回　一部三錢半

▲西川光次郎、山口義之の二氏、主として之を經營し、他の諸同志之を助く
▲日本社會黨々報は常に本紙上に掲載せらるべし
▲十部郵税共五錢、二十部……


體操器械
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
NO 5 Urajimbo-cho KANDA. TOKYO
SA
御用諸學校
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
改良ロンテニス
二重枠ラケット一組
一號品 一二、五〇〇
二號品 一一、〇〇〇
三號品 八、八〇〇
四號品 七、四〇〇
五號品 六、七〇〇
六號品 五、七〇〇
七號小學用 四、七〇〇
八號婦人用 六、〇〇〇
九號婦人用 七、〇〇〇
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
電 本 484
ピンポン室内テニス
一號 一箱 一、二二〇
二號 同 一、五〇〇
三號 同 一、六八〇
四號 同 一、八三〇
號外 同 〇、八八〇
改良テニスネット
一號 一張 四間半 一、七五〇
二號 一張 五間半 二、二五〇
三號 一張 六間 二、四五〇
四號 一張 七間 二、九五〇
ゴム入フートボール
二號 一個 四、〇〇〇
三號 同 四、五〇〇
四號 同 五、〇〇〇
五號 同 五、五〇〇
六號 同 六、〇〇〇
七號 同 六、五〇〇
八號 同 七、〇〇〇
體操遊戯器械一切
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四百八十四



# 腦病　靜靖丸　頭痛

**腦力を明快にし腦病神經病を全治す**

**腦病** にて常に頭重く、記憶弱く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

**神經** 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

**逆上** 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

**頭痛** 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及ひ頭痛持の人

**不眠** 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を强健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉效あり、

**藥價** 二日分弱金拾錢　廿二日分（常備用）金壹圓　十日分金五拾錢
六日分金三拾錢　四日分金貳拾錢

本舗　東京市日本橋區藥研堀町　藥劑師　高木與八郎

**逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す**